

吉ヶ浦遺跡

—第3次調査—

平成20年
2008
太宰府市教育委員会

序

本書は、太宰府市高雄六丁目の吉ヶ浦遺跡における宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書です。

調査地は太宰府市の南東部の高雄丘陵上に位置し、周辺では弥生時代から古墳時代にかけての大規模な集落や墳墓が発見されていました。

今回の調査では弥生時代中期から古墳時代後期の竪穴住居や柵と思われる遺構が確認され、高雄地区での集落の形成過程を知る上で貴重な成果を得ることができました。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心から願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました関係各位ならびに諸機関の方々へ心からお礼申し上げます。

平成 20 年
太宰府市教育委員会
教育長 關 敏治

例 言

1. 本書は吉ヶ浦遺跡第3次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 調査地点は太宰府市高雄6丁目4238-3外4筆に所在し、調査は平成18年10月18日から同年12月6日まで実施した。調査面積は384㎡である。
3. 発掘調査は、太宰府市教育委員会の指導のもとに、(財)埋蔵文化財サポートシステムが実施した。
4. 遺構の実測の基準点は、平面直角座標系第Ⅱ系(旧日本測地系)を利用した。よって本書に示される方位はG.N.(座標北)を指している。
5. 遺構の実測図作成は平島義孝・毛利恒彦・中尾陽介・下條誠文が行い、遺構の写真撮影は平島が行った。調査地の空中写真撮影は、(財)空中写真企画(代表壇隆夫)が行った。
6. 報告書作成業務は(財)埋蔵文化財サポートシステムで行った。
7. 遺物の実測は今岡一恵・平島が行い、遺物の写真撮影は松尾・毛利・平島が行った。
8. 遺構実測図のデジタルトレースは古賀栄子・毛利が行い、遺物実測図のデジタルトレースは古賀が行った。
9. 出土した遺物及び全ての図面ならびに写真等の記録は、太宰府市教育委員会が保管している。
10. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構種別の略号については、SA 柵列、S1 竪穴住居跡、SK 土坑、SX 性格不明遺構である。

吉 3 S1 005

遺跡略号 調査次数 遺構種別略号 遺構番号

11. 本書で用いる分類は以下の文献に記載されている。

須恵器 小田富士雄 「古墳時代 九州」『日本土器辞典』雄山閣 1996年

舟山良一 松本敏三 池田榮史 編 『須恵器集成図録 第5巻 西日本編』雄山閣 1996年

土師器 財団法人古都太宰府を守る会 『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅲ』太宰府市の文化財 第20集 1993年

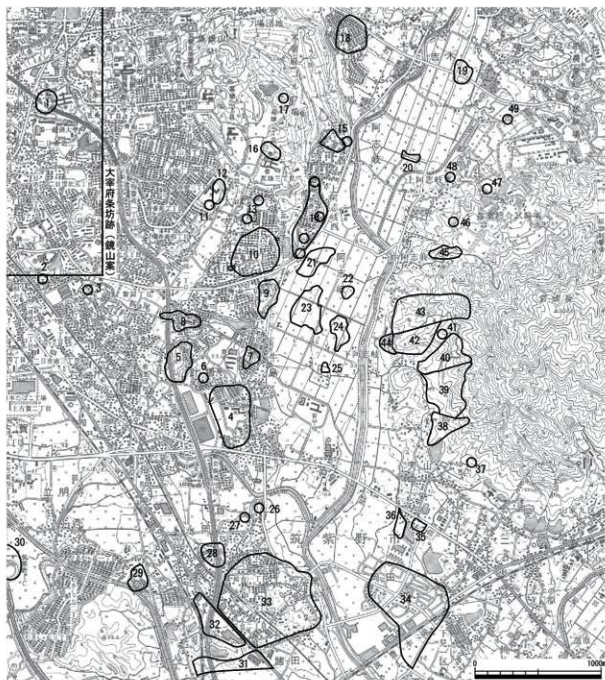
弥生土器 太宰府市教育委員会 「国分松本遺跡第9次調査」『太宰府・国分地区遺跡群Ⅱ』

太宰府市の文化財 第94集 2007年

12. 遺物実測図中の断面黒塗りは須恵器である。
13. 遺構・遺物実測図中の○番号は遺物取り上げ番号であり、両実測図とも対応する。
14. 遺構・遺物写真ならびに各表については、付属のCD-ROMに収録している。
15. 本書の執筆は、「第2章1. 調査にいたる経過」を山村信榮(太宰府市教育委員会)、他を平島が行った。尚、編集は毛利の協力のもと平島が行った。

目次

第1章 位置と歴史環境	1
第2章 調査にいたる経過と調査体制	
1. 調査にいたる経過	3
2. 調査組織	3
3. 調査および整理方法	5
第3章 調査の概要	
1. 基本層位	9
2. 遺構	
(1) 柵列	9
(2) 竪穴住居跡	9
(3) 土坑	18
(4) その他の遺構	19
3. 出土遺物	
(1) 柵列	19
(2) 竪穴住居跡	19
(3) 土坑	30
(4) その他の遺構	31
第4章 まとめ	34
付表	
太宰府市周辺遺跡出土住居一覧表	
溝出土遺物割合表	
焼土塊計測表	
遺構番号台帳	
土器計測表	
出土遺物一覧表	
写真図版	
PL. 1～16	
CD-ROM	
遺構・遺物写真 (PDF データ)	
各表 (Excel データ)	
太宰府市周辺遺跡出土住居一覧表	
溝出土遺物割合表	
焼土塊計測表	
遺構番号台帳	
土器計測表	
出土遺物一覧表	



- | | | | | |
|------------|---------------|---------------|-------------|----------------|
| 1. 君畑古墳群 | 11. 下高尾古墳 | 21. 御笠地区遺跡C地点 | 31. 仮塚南遺跡 | 41. 宮崎古墳 |
| 2. 五穀神山古墳 | 12. 菰浦浦古墳群 | 22. 御笠地区遺跡D地点 | 32. 諸田仮塚遺跡 | 42. 阿志岐シメノグチ遺跡 |
| 3. カケ塚古墳 | 13. 今王古墳群 | 23. 御笠地区遺跡E地点 | 33. 常松遺跡 | 43. 阿志岐古墳群 |
| 4. 峠山古墳群 | 14. 柚ノ木遺跡・古墳群 | 24. 御笠地区遺跡F地点 | 34. 岡田地区遺跡群 | 44. 宮崎遺跡 |
| 5. 野黒坂遺跡 | 15. 六本松遺跡・古墳 | 25. 御笠地区遺跡G地点 | 35. 鞆掛遺跡 | 45. 杉谷古墳群 |
| 6. イカリノ上古墳 | 16. 集り古墳群 | 26. 鳥井元古墳 | 36. 日焼遺跡 | 46. 星隈古墳 |
| 7. 上ノ浦古墳群 | 17. 松ヶ浦古墳 | 27. 鏡塚古墳 | 37. 峰古野古墳 | 47. 大谷古墳 |
| 8. 大曲り遺跡 | 18. 塚口古墳群 | 28. 永岡遺跡 | 38. 天山古墳群 | 48. 尺ヶ浦古墳 |
| 9. 高雄遺跡 | 19. 御笠地区遺跡A地点 | 29. 大牟田西遺跡 | 39. 老松神社古墳群 | 49. 六度古墳 |
| 10. 吉ヶ浦遺跡 | 20. 御笠地区遺跡B地点 | 30. 貝元遺跡 | 40. 隘道古墳群 | |

fig. 1 太宰府市周辺遺跡分布図 (S = 1/30,000)

第1章 位置と歴史環境

太宰府市は、北に四王寺山地、北東に三郡山地、西に脊振山地と山塊に囲まれた狭長な平野部に中心地があり、福岡平野の南端部に位置している。このような地理環境から九州北部と中南部を結ぶ主要路線が通るようになり、古代から現代にかけて交通の要所となっている。本報告の吉ヶ浦遺跡第3次調査地点は、太宰府市南東部の高雄丘陵にある。高雄丘陵は、三郡山地から派生した低丘陵で、南北方向にのびている。丘陵の西側には狭長な平野部があり、南側には筑後平野が広がっている。

吉ヶ浦遺跡の発掘は、昭和46年に福岡県教育委員会が団地造成に伴う調査を行ったのが始まりである。調査区は本調査地点より標高が10m高い高雄丘陵の上方に所在し、弥生時代中期から後期の住居跡・甕棺墓群・木棺墓群、古墳時代中期の住居跡、後期の円墳群が確認された。遺物には弥生時代中期前葉・中葉の遺構から出土した鉄斧・鉈・鉄鍬があり、国内の鉄生産開始時期に関わる資料として価値ある発見であった。また、甕棺墓では出土人骨に付着した衣服の一部と考えられる布片、壺状の釐があり、それぞれ貴重な資料である。本調査地点から約200m東に位置する柚ノ木遺跡でも弥生時代中期後半から後期初頭の甕棺墓群、古墳時代後期の円墳群が検出されており、吉ヶ浦遺跡と同じ様相が見られる。

高雄丘陵東側の阿志岐・吉木平野部では御登地区遺跡が調査され、弥生・古墳時代の集落の変遷が窺える。さらに南に広がる平野部では、日焼遺跡・岡田地区遺跡が調査され、日焼遺跡は弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭、岡田地区遺跡は古墳時代後期の堅穴住居跡が発掘された。

高雄丘陵から南に続いている低丘陵では野黒坂遺跡・大曲り遺跡が所在している。野黒坂遺跡では主に弥生時代・古墳時代後期の堅穴住居跡が確認されている。大曲り遺跡においては古墳時代中期末～後期の堅穴住居跡が見られる。

高雄丘陵の南にある脊振山地から派生する丘陵上には永岡遺跡・常松遺跡・仮塚南遺跡が位置する。永岡遺跡では弥生時代中期の甕棺墓・木棺墓群が展開し、常松遺跡においては弥生時代前期末～中期後半の堅穴住居跡・甕棺墓群、仮塚南遺跡は弥生時代後期後半・古墳時代後期の堅穴住居跡が調査された。

高雄丘陵とその東側に対峙する宮地岳山麓や周辺の低丘陵では数多くの古墳群が発見されている。高雄丘陵では、今王古墳群・下高尾古墳・菖蒲浦古墳群・君畑古墳群、宮地岳山麓部では阿志岐古墳群・脇道古墳群・老松神社古墳群・天山古墳群、高雄丘陵の南端部に位置する低丘陵では上ノ浦古墳、イカリノ上古墳が所在している。

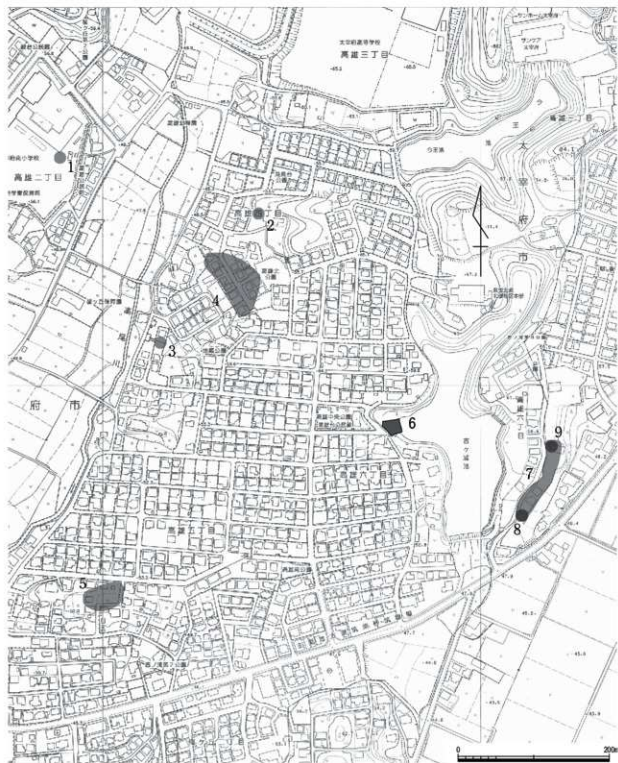
太宰府市高雄地区周辺では上述した様相の遺跡が展開しており、それぞれの時代の集落遺構の周辺に甕棺墓群や古墳群が分布している状況から、いくつかの勢力に分かれていたことが推測できる。また、弥生時代に形成された甕棺墓群や集落から成る勢力は、そのまま古墳時代にも継続していた可能性も考えられている。

【参考文献】

太宰府市教育委員会編 『太宰府市史 考古資料編』 1992年

太宰府市教育委員会編 『太宰府市史 環境資料編』 2002年

筑紫野市史編纂委員会 『筑紫野市史 資料編(上) 考古資料』 2001年



1. 菖蒲浦古墳群 2. 今王2号墳 3. 今王3号墳 4. 今王遺跡第2次調査 5. 吉ヶ浦遺跡第2次調査
6. 吉ヶ浦遺跡第3次調査 7. 柚ノ木遺跡 8. 柚ノ木1号墳 9. 柚ノ木2号墳

fig. 2 周辺調査実績 (S = 1/5,000)

第2章 調査にいたる経過と調査体制

1. 調査にいたる経過

本調査地点は株式会社西日本トラストより平成17(2005)年10月12日に埋蔵文化財の有無に関する照会があり、現地を確認したところ開発対象範囲内の一部にあたる池の水際において住居跡と思われる遺構の一部と古墳時代に属する遺物が採取された。これに基づく協議と予備調査の結果、同社と太宰府市教育委員会が発掘調査に関する事業の契約をおこない、太宰府市はこの調査を埋蔵文化財サポートシステムに業務委託し発掘調査および整理作業を実施した。事業の業務監理については太宰府市文化財課の山村がおこなった。調査期間は平成18(2006)年10月18日から同年12月6日の間であり、報告書刊行を含む整理作業業務は調査に引き続き平成20年12月までおこなっている。

2. 調査組織

調査・整理を実施した平成18年度から平成20年度の調査組織は以下のとおりである。

太宰府市文化財課 調査組織年度別一覧

(平成18 / 2006年度)

総括	教育長	関 敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	齋藤実貴男
		吉原慎一 (7月1日～)
	事務主査	大石敬介 (～6月30日)
調査	主任主査	城戸康利
		山村信榮 (調査管理担当)
		中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	高橋 学 (事前審査担当)
		宮崎亮一
	技師 (嘱託)	柳 智子
		下高大輔

(平成19 / 2007年度)

総括	教育長	関 敏治
庶務	教育部長	松永栄人 (～9月30日)
		松田幸夫 (10月1日～)
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信 (～9月30日)
		菊武良一 (10月1日～)
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一

	調査	主任主査	齋藤実貴男 城戸康利 山村信榮（整理作業管理担当） 中島恒次郎
		技術主査 主任技師	井上信正 高橋 学 宮崎亮一
		技師（嘱託）	柳 智子 下高大輔 大塚正樹 端野晋平
(平成 20 / 2008 年度)			
	総括 庶務	教育長 教育部長 文化財課長 保護活用係長 調査係長 主任主査	関 敏治 松田幸夫 齋藤廣之 菊武良一 永尾彰朗 吉原慎一 齋藤実貴男
	調査	主任主査	城戸康利 山村信榮（整理作業管理担当） 中島恒次郎
		技術主査 主任技師	井上信正 高橋 学 宮崎亮一
		技師（嘱託）	柳 智子 下高大輔 大塚正樹

㈱埋蔵文化財サポートシステム 調査組織

社長	川谷昭彦
副社長	廣瀨一夫
福岡支店	松尾直子
福岡支店技師	平島義孝
福岡支店技師	毛利恒彦
福岡支店技師	中尾陽介
福岡支店技師	嶋田 聡

現地調査及び報告書作成にあたっては、下記の方々のご協力を頂いた。記して感謝いたします。

岩切ふえ、大海雅子、岡本妙子、片田清子、加藤美智子、高木幸子、堤末子、角田初恵、藤田和子、前原光恵、松尾千代子、松延広喜、松村智子、天本加代子、今岡一恵、上田光子、木村美子、山内由美、藤井文子

また整理作業において、石木秀啓氏・林潤也氏（大野城市教育委員会）よりご指導・助言を頂いた。ここに記して感謝の意を表します。

3. 調査および整理方法

調査および整理方法は「佐野地区遺跡群Ⅰ」（太宰府市教育委員会 1989「太宰府市の文化財」第14集）、「太宰府市における埋蔵文化財調査指針」（太宰府市教育委員会 2001年9月改定）に準拠した。

発掘調査における測量基準点はGPS測量により新設し、その測量点から調査区内にグリッド杭を設定した。遺構実測は3mおきに設置したグリッド杭を基準に行い、個別遺構実測に伴う任意で設定した実測基準点は遺構全体図（S=1/20）中に図示し、合成が可能な状態にしている。

本遺跡は集落遺跡であったため住居跡が検出された。その内3S1005ではの遺物出土状況を考察するために遺構内を4分割し、それぞれの区域で遺物を取り上げた。しかし、今回の調査では出土状況に差異が見られなかったため、本書では一括資料として報告する。また、当初二つの遺構として調査した中には、同一遺構と判断できる遺構があり、その遺構は整理作業段階で遺構実測図を合成し、遺構番号は二つのうち若い番号を使う。出土遺物も同一遺構の遺物として報告する。

【基準及び指針】

文化庁（2004）「行政目的で行う埋蔵文化財の調査についての基準」

福岡県教育委員会教育長通知（平成15年9月11日付 15教文調第84号）「九州地区埋蔵文化財発掘調査基準」

福岡県教育委員会教育長通知（平成18年9月21日付 18教文第4168号）「九州地区埋蔵文化財発掘調査基準」の一部改正について」

太宰府市教育委員会（2001）「太宰府市における埋蔵文化財調査指針（2001年9月改正）」



fig. 3 吉ヶ浦遺跡第3次調査遺構全体図 (S=1/150)

fig. 4 A3 版折込実測図

fig. 4 A3 版折込実測図 裏面

第3章 調査の概要

1. 基本層位 (fig. 4・5, PL. 1-3, 2-1, CD写真1・2)

調査区は吉ヶ浦池の西岸に位置しており、緩斜面に遺構が展開している。記録によれば吉ヶ浦池は明治時代末期に築造したとされており、上層の客土、その下層の暗黒茶色粘質土層は明治末期から現代までの土層と思われる。暗黒茶色粘質土層を除去すると第1遺構面が検出され、遺構は灰茶色土層上面に形成されている。第2遺構面は灰茶色土下層の褐赤色土・褐黒色土・茶色土層上面で、第3遺構面は花崗岩風化土の地山面である。もとはため池であったためか標高51 m前後の遺構では水が湧き出る状態であった。



fig. 5 土層模式図

2. 遺構

調査区内の地形は標高53～50 mの緩斜面になっており、その斜面上に遺構が展開していた。主な遺構は柵列3条・竪穴住居跡5棟・土坑2基・不明遺構1基である。

(1) 柵列

3SA045 (fig. 6)

調査区中央部から南東部に位置し、標高51.85～51.35 m間の緩斜面で検出した遺構である。確認した柱穴は9基(a～i)である。柵列のプランは3SA045A(a～f)と3SA045B(g・h・d・e・i)の2通りが考えられ、造り替えが行われた可能性がある。柱穴間は2.3～3.0 mを測る。遺構の切り合い関係は、3SA045が3SA050・3SI010・030・3SK025を切る。

3SA050 (fig. 6)

調査区中央部に位置し、標高51.70～51.50 m間の緩斜面で検出した遺構である。確認した柱穴は4基(a～d)を数え、柱穴間は2.6～2.8 mを測る。遺構の切り合い関係は、3SA050が3SI010・3SK025を切り、3SA045・3SI005に切られる。

(2) 竪穴住居跡

3SI005 (fig. 7, PL. 2-2・3, 3-1・2, CD写真3～14)

調査区北側に位置し、標高51.70～51.05 m間の緩斜面で検出した遺構である。平面形状は方形を呈し、長軸約4.48 m、短軸約4.46 m、最深度約0.65 mを測る。発掘時は3SI005と3SI035に分けて調査したが、同一遺構と判断した。住居跡内の土層観察では、土砂が流れ込んだ様相が見られ、自然堆積であると考えられる。遺構の切り合い関係は、3SI005が3SI010を切る。

柱穴(3SI005e～h・k) 5基を検出したが、検出位置より3SI005e～hの4基が主柱穴と考える。主柱穴の深さは0.05～0.6 m、東西柱穴間は約2 m、南北柱穴間約1.8 mを測る。

壁溝(3SI005i) 住居跡内西壁と北壁面に沿う状態で検出された。深さは床面から約0.1 mを測る。

土坑(3SI005j) 住居跡内西側に位置し、3SI005hに接する。深さは床面から約0.5 mを測る。

カマド(3SI005a) 住居跡内東壁面中央部で検出した。焚口～奥壁まで約0.8 m、両袖部の幅約0.9 mを測り、焚口部では被熱痕跡が見られた。また、3SI005東部分の遺構検出時に長い楕円形状の石を

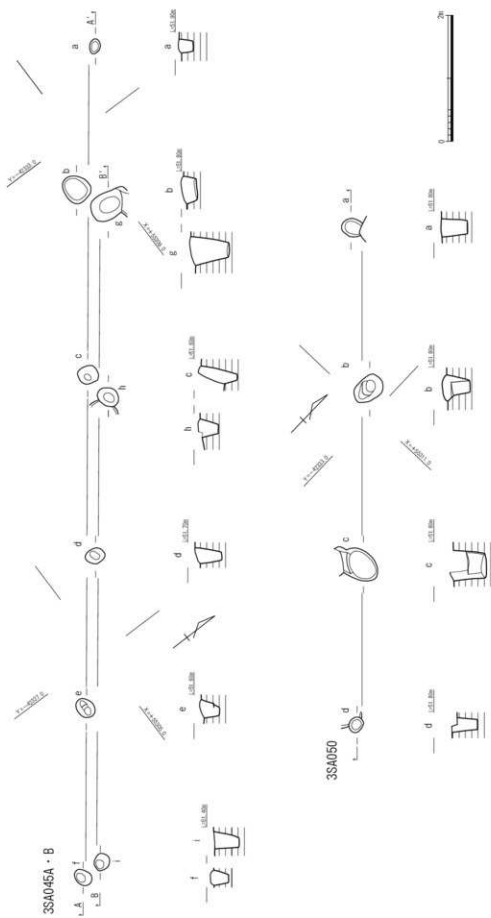


Fig. 6 3SA045A · B, 050 实测图 (S = 1/60)

取上げており、これが支脚であった可能性が高い。カマド北側と燃焼部では土師器の甕や壺等が出土した。

3S1010 (fig. 8, PL. 3-3, 4-1~3, CD写真15~23)

調査区中央部に位置し、標高約51.45~51.10m間の緩斜面で検出した遺構である。平面形状は長方形を呈し、長軸約4.5m、短軸約4.05m、最深部約0.5mを測る。住居跡内土層4層は多量の炭化物を含み、住居跡内南側から西側に集中していた。また、カマド(3S1010a)の北側では被熱痕跡がみられた。これらのことから焼失住居と考えられる。柱穴gの南東側では、厚さ約0.08m前後の平らな花崗岩が出土しており、作業台として使われていた可能性がある。遺構の切り合い関係は、3S1010が3S1020を切り、3S1005に切られる。

貼床 住居跡内東側床面は西側よりも0.05m前後低く、高さを調整するために貼床を行ったと考えられる。また、カマド(3S1010a)南側で出土した遺物が床面より0.05m程度上位地点で出土していることから貼床施工の可能性もある。貼床は住居跡内土層4層内に相当するが、貼床層の分層はできなかった。

柱穴(3S1010b~i) 8基を検出したが、検出位置よりS1010b・c・e・hの4基が主柱穴と考える。主柱穴の深さは0.1~0.5m、東西柱穴間約2.1m、南北柱穴間約1.6mを測る。

壁溝(3S1010j) 住居跡内西側と北側壁面に沿う状態で検出された。深さは床面から約0.03~0.05mを測る。

カマド(3S1010a) 住居跡内東壁面中央部で検出した。焚口~奥壁まで約0.82m、両袖部の幅約0.98mを測る。焚口部~燃焼部にかけて床面より0.1m程度掘り窪められている。燃焼部では土師器の甕が倒立した状態で置かれており、その下からはピットが検出された。出土遺物には土製の支脚片があり、燃焼部のピットは支脚を設置していた痕跡である可能性が高い。カマド南側では土師器の甕片・模倣坏、須恵器の坏蓋、カマド内埋土からはミニチュア土器の坏が出土した。

3S1015 (fig. 9・10, PL. 5-1~3, 6-1, CD写真24~35)

調査区西側に位置し、標高52.65~51.00m間の緩斜面で検出した遺構である。平面形状は方形を呈し、長軸約5.6m、短軸約5.4m、最深部約0.5mを測る。

貼床 住居跡内中央部を残し、その周辺で貼床が確認できた。最も厚い部分では約0.1mを測る。住居跡内土層の9層に相当する。

柱穴(3S1015c~i) 9基を検出したが、検出位置よりS1015c・d・f・gの4基が主柱穴と考える。主柱穴の深さは0.17~0.7m、東西柱穴間は約2.6m、南北柱穴間は3.05mを測る。貼床上面より柱穴プランが確認できたため、貼床設置後に柱を建てたと思われる。

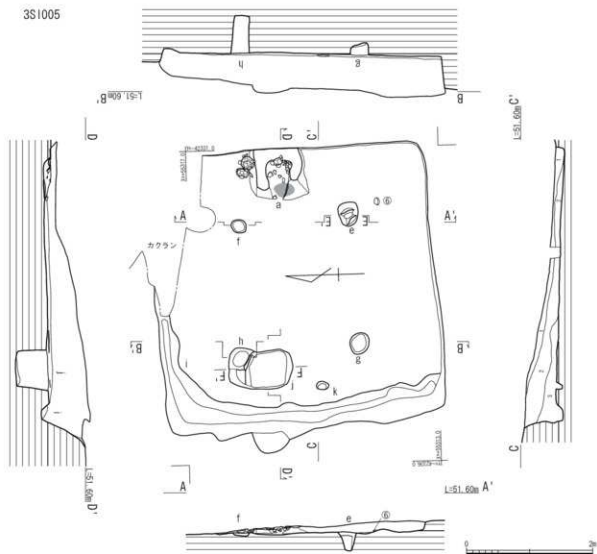
壁溝(3S1015b) 住居跡内南と西壁に沿う状態で検出された。深さは床面から約0.1mを測る。西壁溝内から土師器の坏②等が出土した。

カマド(3S1015a) 住居跡内北壁中央部で検出された。焚口~奥壁まで約0.9m、両袖部の幅約0.75mを測る。焚口部~燃焼部にかけて床面より0.08m程度掘り窪められている。燃焼部では花崗岩製の支脚が検出された。カマド裾部西側では土師器の坏①が伏せた状態で出土した。また、図示はしていないが裾部東側でも同じ状態で土師器の坏が出土した。

3S1020 (fig. 11, PL. 6-2・3, 7-1・2, CD写真36~49)

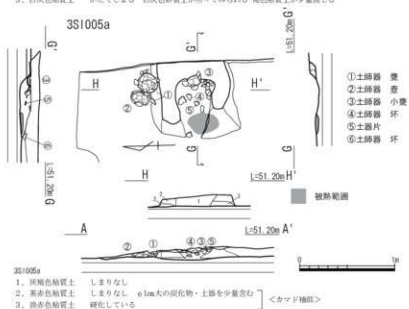
調査区東側に位置し、標高51.20~50.75m間の緩斜面で検出した遺構である。平面形状は方形を呈し、長軸約4.75m、短軸約4.7m、最深部約0.48mを測る。住居跡内土層5層は多量の炭化物を含み、住居跡内北側から東側に集中していた。また、柱穴3S1020b南側で検出された炭化物は木目が確認

3S1005



3S1005

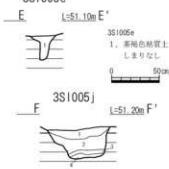
1. 灰褐色粘質土 軟質 白灰色粘質土ブロック (φ3~5cm) をやや多量に含む
2. 褐色粘質土 軟質 白灰色粘質土ブロック (φ3cm) を少量含む
3. 白灰色粘質土 かたくしまる 白灰色砂質土が所々でみられる 褐色粘質土が少量混じる



3S1005a

1. 灰褐色粘質土 しまりなし
 2. 赤褐色粘質土 しまりなし φ1cm大の炭化物・土器を少量含む
 3. 赤褐色粘質土 硬化している
- <カマド補部>

3S1005e



3S1005e

1. 赤褐色粘質土 しまりなし

3S1005j

1. 赤褐色粘質土 赤褐色土・黒褐色土・灰白色土ブロック (φ3~5cm) を多量に含む しまりなし
2. 褐色粘質土 赤褐色土・灰白色土ブロック (φ3~5cm) をやや多量に含む かつくしまる
3. 灰白色粘質土 かつくしまる
4. 褐色粘質土 かつくしまる

fig. 7 3S1005 実測図 (S = 1/60, 3S1005a・e は 1/40)

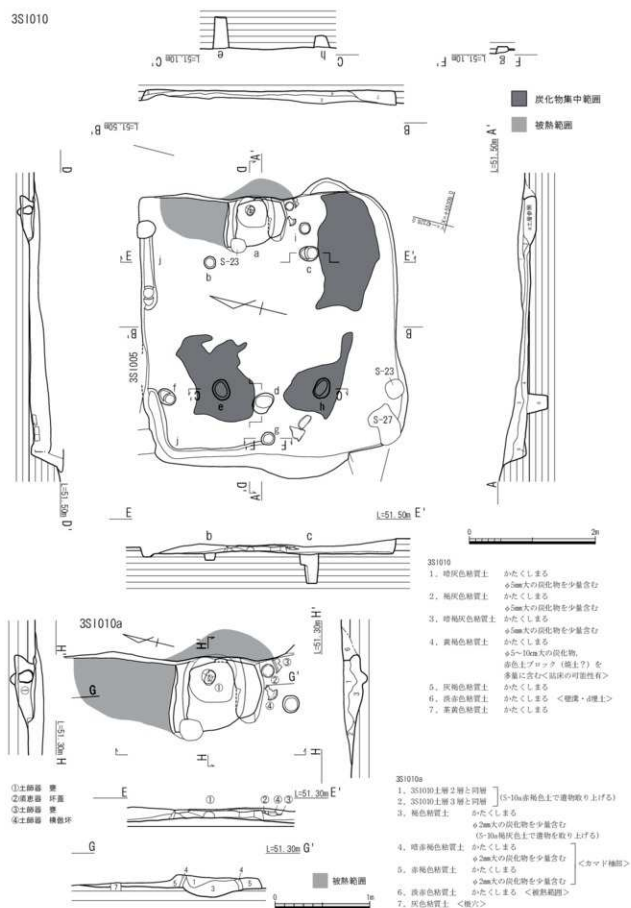
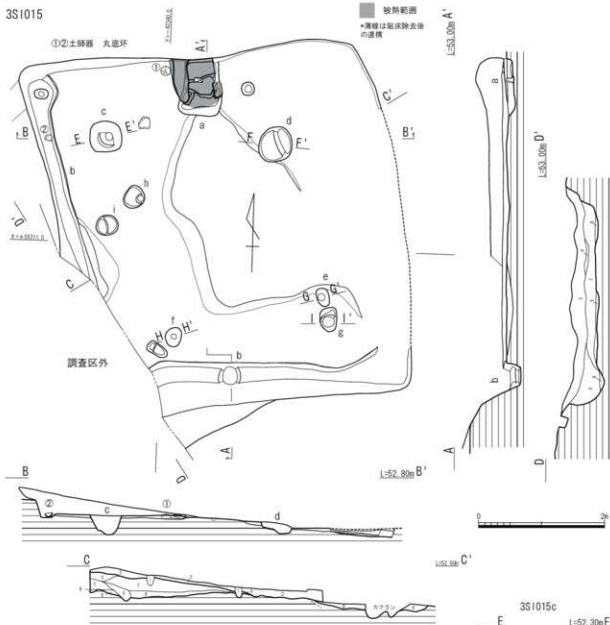


fig. 8 3S1010実測図 (S = 1/60, 3S1010aは1/40)

3S1015



3S1015

1. 黒褐色粘質土 <無穴>
 2. 黄褐色粘質土 かたくしめる φ3m大の灰褐色土を少量含む
 3. 赤褐色粘質土 かたくしめる φ3m大の灰褐色土を少量含む φ1~3m大の赤褐色土ブロックを少量含む
 4. 赤褐色粘質土 かたくしめる φ3m大の灰褐色土を少量含む } IS-15灰褐色土で
 5. 暗茶色粘質土 ややかたくしめる φ3m大の灰褐色土を少量含む <無穴> 遺物を取り上げる
 6. 暗茶色粘質土 かたくしめる φ1~3m大の赤褐色土ブロック・黄褐色土を少量含む φ3m大の灰褐色土を少量含む
 7. 黄褐色粘質土 かたくしめる φ3m大の灰褐色土を少量、φ3m大の白色土ブロックを少量含む IS-15灰褐色土で遺物を取り上げる
 8. 黄褐色粘質土 かたくしめる <3層上>
 9. 黄褐色粘質土 かたくしめる φ3m大の黒褐色土ブロック・白灰色土ブロックを少量含む<底床> IS-15灰白色土で遺物を取り上げる

3S1015d
L=52.30m F'

3S1015d

1. 黄褐色粘質土
 かたくしめる
 φ3m大の灰褐色土を少量含む、
 φ3m大の白色土ブロックを少量含む

3S1015e
L=52.30m G'

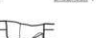
3S1015e

1. 灰褐色粘質土
 かたくしめる
 φ3m大の灰褐色土を少量含む
 2. 灰褐色粘質土
 かたくしめる
 φ1m大の灰褐色土ブロックを少量含む

3S1015f
L=52.30m H'

3S1015f

1. 灰褐色粘質土
 かたくしめる
 2. 黄褐色粘質土
 かたくしめる
 φ3m大の灰褐色土、
 φ3m大の白色土ブロックを少量含む

3S1015g
L=52.30m I'

3S1015g

1. 黄褐色粘質土
 かたくしめる
 φ3m大の灰褐色土を少量含む
 2. 黄褐色粘質土
 かたくしめる
 φ3m大の灰褐色土、
 φ3m大の白色土ブロックを少量含む

fig. 9 3S1015 実測図 (S = 1/60, 3S1015c・d・f・g は S = 1/40)

できるほど残存状況がよく柱材と思われる。これらのことから焼失住居の可能性がある。床面直上からはカマド内出土土器①・②を除いて③～⑦までの5点の土器が出土した。それぞれ完形に近く、⑦ (fig. 23-8) の場合は、上位で甕 (fig. 22-7) の破片が多量に出土し、また⑦内には甕の底部片が入っていた。これらの出土状況から⑦は甕を乗せた状態であったと判断できた。遺構の切り合い関係は、3S1020が3S1010に切られる。

貼床 住居跡内南東部で確認された。最も厚い部分は約0.1mを測る。

柱穴 (3S1020b～e) 6基を検出したが、検出位置より3S1020b～eの4基が主柱穴と考える。深さは0.33～0.48m、東西柱穴間は1.85～2.0m、南北柱穴間は約2.0mを測る。3S1020cが貼床上面より確認できたため、貼床設置後に柱を立てたと思われる。

壁溝 (3S1020f) 住居跡内西壁で壁に沿う状態で検出された。溝としては全長が短く、長軸約0.53m、最深部約0.07mを測る。

土坑 (3S1020g) 住居跡内南西角で検出された。深さは最深部で約0.1mを測り、床面は土坑北壁際で深く掘り込んだ後、南壁に向かってスロープ状に上がっている。土坑からは土師器の坏が出土した。

被熱範囲 (3S1020h) 住居跡内南側で検出された。長軸約0.5m、短軸約0.4mの長方形に広がっており、被熱範囲の最も厚い部分は床面から約0.06mを測る。被熱範囲中央部は南壁面から約0.8mの間隔がある。カマド (3S1020a) の被熱部分も東壁面から約0.8mの間隔があり、このことから被熱範囲は造り変え前のカマドが設置していた痕跡であると推測できる。

カマド (3S1020a) 住居跡内東壁面中央よりやや南側で検出された。焚口～奥壁まで約0.97m、両袖部の幅は推定約1mを測る。焚口部では二つの長い石が立ち、その間に石が横たわっていた。焚口を構成していた袖石と天井石と思われる。これ以外のカマド残存部は東壁面で袖部がわずかに見られ、大部分が壊れていた。焚口～燃焼部に広がる被熱部分は盛り上がった状態になっており (カマド内土層3層)、この状況からカマド内床面に粘土を貼っていた可能性が考えられる。また、燃焼部では土師器の甕が正立した状態で出土し、その周辺では、土師器の甕、甕の破片が散乱していた。これらの遺物の出土地点はカマド崩落土にあたるカマド内土層1層内と考える。

3S1030 (fig. 12, Pl. 7-3, 8-1, CD写真50・51)

調査区南東側に位置し、標高51.50～50.80m間の緩斜面で検出された遺構である。平面形状は円形を呈し、推定直径は6.6m前後、最深部は約0.28mを測る。発掘時はS-30とS-40の東西に分けて調査したが、完掘時のプランなどから、結果的に一つの円形住居跡と判断した。住居跡内土層4層下面が床面である。遺構の切り合い関係は、3S1030が3SA045に切られる。

貼床 検出時3S1040としていた住居跡内土層7層以下の粘質土が貼床と考える。住居跡内全域でみられ、厚さは0.3～0.4mを測る。貼床掘削後に3S1030a・e・iを検出したが、後に貼床上面の遺構写真を検証すると、a・e～hの遺構プランは貼床上面で確認できた可能性がある。



fig. 10 3S1015a 実測図 (S = 1/40)

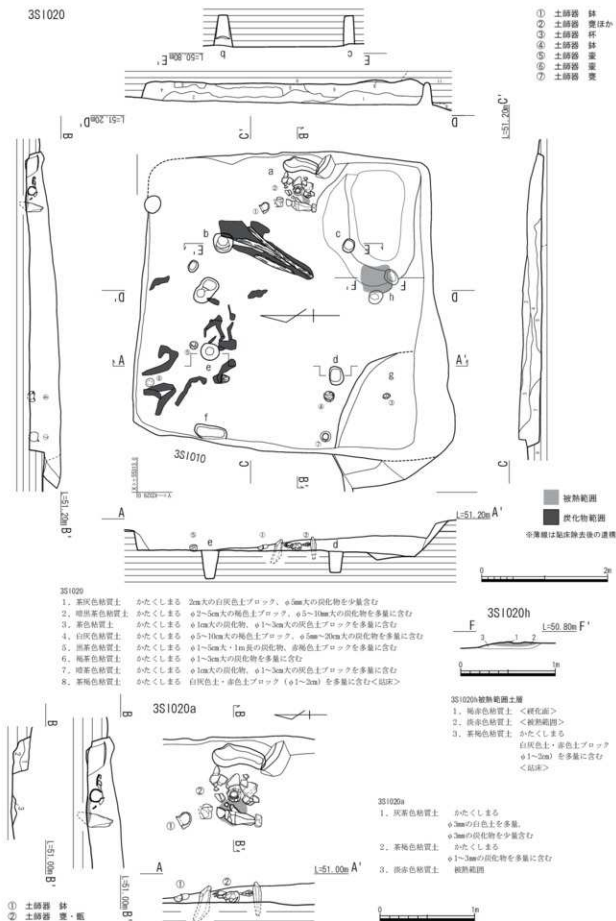


fig. 11 3S1020 実測図 (S = 1/60, 3S1020a・h は 1/40)

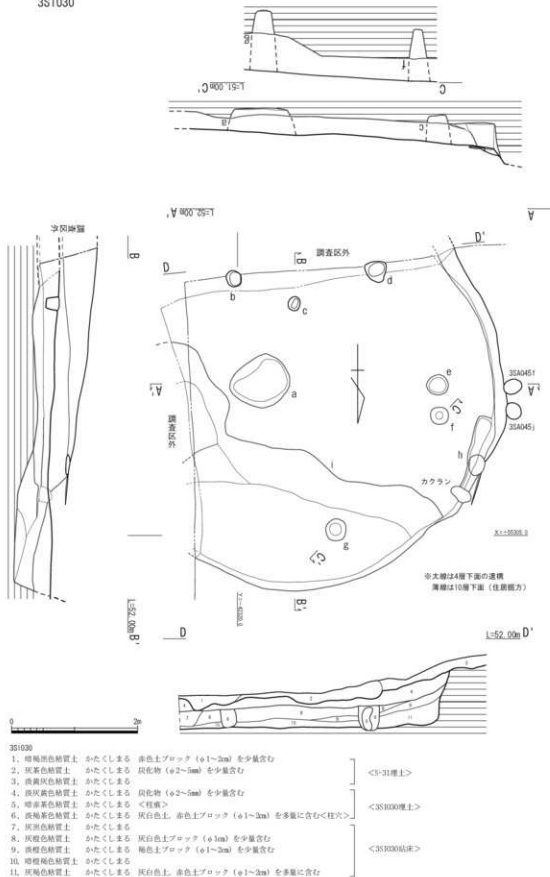


fig. 12 3S1030 実測図 (S = 1/60)

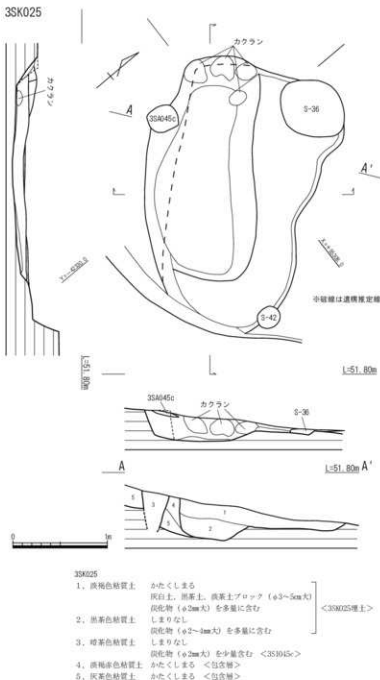


fig. 13 3SK025 実測図 (S = 1/40)

(3) 土坑

3SK025 (fig. 13, Pl. 8-2・3, CD写真 52~54)

調査区中央部に位置し、標高 51.80 ~ 51.27 m 間の緩斜面で検出した遺構である。平面形状は不整長方形を呈し、2段に掘られている。2段目の平面形状も長方形である。長軸約 2.83 m、短軸約 2.06 m、1段目の深さ約 0.06 m、2段目の深さ約 0.37 m を測る。遺構の切り合い関係は、3SI025 が 3SA045・3SP036 に切られる。

3SK052 (fig. 14)

調査区南西側に位置し、標高 50.5 m 前後の地点で検出した遺構である。平面形状は不整形な円を呈し、2段に掘られている。長軸約 1.32 m、短軸約 1.24 m、1段目の深さ約 0.18 m、2段目の深さ約 0.37 m を測る。出土遺物には縄文土器粗製深鉢片があり、遺構の 1段目で多量に見られた。また、少量に弥

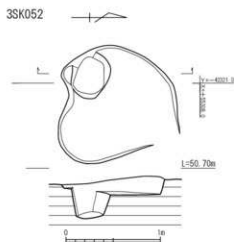
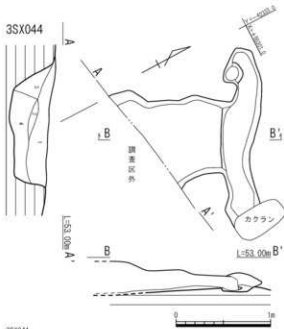


fig. 14 3SK052 実測図 (S = 1/40)

柱穴 (3SI030b ~ g) 6基を検出したが、検出位置より 3SI030d・f・g の 3基が主柱穴と考える。柱は住居跡内土層から貼床設置後に建てたと思われる。主柱穴の深さは、床面から 0.33 ~ 0.95 m、d-f 間は 2.5 m、f-g 間は 2.45 m を測る。

壁溝 (3SI030h) 住居跡内西側で貼床除去後に検出した。全長は短く、長軸約 1.2 + α m、最深部は約 0.15 m を測る。西壁に沿う状態で検出された。

土坑 (3SI030a・i) a は住居跡内中央付近に位置する。長軸約 1 m、短軸約 0.9 m、貼床上面からの深さは約 0.4 m を測り、不整形な円形を呈す。i は地山面に形成された遺構で、住居跡内北壁に接する位置に見られる。最深部は地山面から約 0.3 m を測り、不整形を呈する。



3SX044

1. 茶褐色粘質土 かたくしまる 土器片を多量に含む
2. 茶褐色粘質土 かたくしまる 炭化物 (φ2mm) を少量含む
3. 淡茶褐色粘質土 かたくしまる 炭化物 (φ2mm) を少量含む
4. 灰褐色粘質土 かたくしまる 炭化物 (φ2mm) を少量含む

fig. 15 3SX044 実測図 (S = 1/40)

3SA045b 出土遺物 (fig. 16, PL. 9-1, CD写真 58)

須恵器

高坏 (1) 脚部のみが残存する。回転ナデ後に脚部外面にカキメ調整、また透かしを施す。

3SA050c 出土遺物 (fig. 16, PL. 9-1, CD写真 58)

土師器

鉢 (1) 口縁部～体部がわずかに残存する。口縁部内面～体部上位外面に細かいミガキが見られる。体部外面下位は削りと思われる。内外面に黒色の皮膜が確認でき、漆を塗布した可能性がある。

(2) 堅穴住居跡

3SI005 出土遺物 (fig. 17, PL. 9-2～8, 10-1, CD写真 59～66)

須恵器

坏蓋 (1) 天井部のみ残存する。回転ナデ後、天井部外面は回転ヘラ削りを行う。口縁部と天井部の境目には突出した稜が見られる。

坏 (2) 口縁部～体部上位が残存する。回転ナデで調整する。立ち上がり先端部内面では沈線状の窪みが見られる。

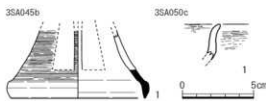


fig. 16 3SA045・050 出土遺物実測図 (S = 1/3)

生土器と思われる土器片が出土しており、このことから1段目と2段目の遺構は別遺構の可能性がある。

(4) その他の遺構

3SX044 (fig. 15)

調査区南西側に位置し、標高 52.8 m 前後地点で検出した遺構である。溝状遺構と長方形遺構が組み合った平面形状を呈すが、両遺構は別遺構の可能性はある。長方形遺構は調査区外に広がるため全体像は不明である。溝状遺構は長軸約 1.9 + α m、短軸約 0.3 m、最深度約 0.19 m を測り、長方形遺構は長軸約 1.26 m、短軸約 0.94 m、最深度 0.34 m を呈す。

3. 出土遺物

(1) 櫛列

土師器

坏 (3～6) 3は須恵器坏の模倣坏である。内面では回転ナデが見られ、外面ではヘラ削り後ミガキを施す。内外面では部分的に黒色の皮膜が確認でき、漆を塗布していた可能性がある。4～6は磨耗により調整が不明瞭であるが、内面ではハケ状工具によるナデかミガキ、外面では削り後にミガキを施していると思われる。6

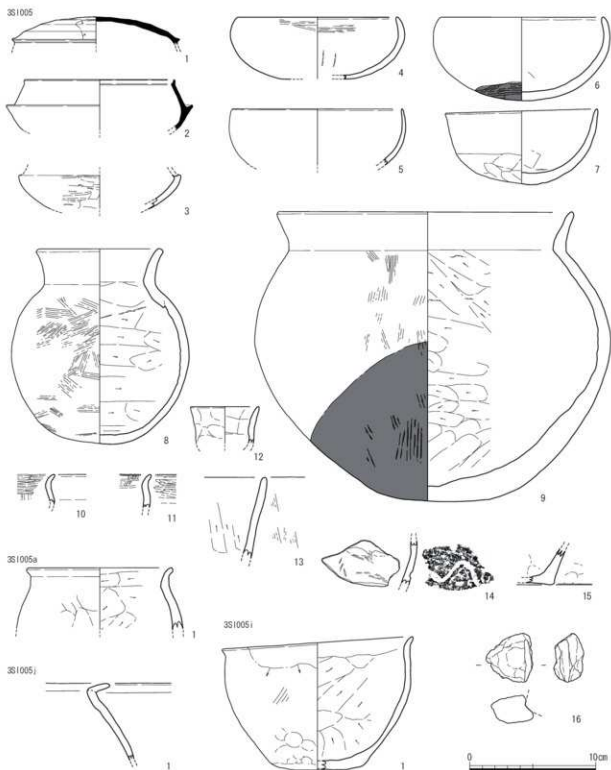


fig.17 3S1005 出土遺物実測図 (1) (S = 1 / 3)

の底部外面では黒斑が確認できる。

甕 (9) 口縁部は調整が不明瞭であるが、ヨコナデと思われる。体部内面は削りを行い、底部内面はナデで調整する。体部～底部外面ではハケメが見られる。体部中位～底部外面では黒斑が確認できる。小甕 (8) 口縁部は調整が不明瞭であるがヨコナデと思われる。体部～底部内面は削りを行い、外面ではハケメが見られる。

鉢 (7) 7の調整は不明瞭であるが、口縁部はヨコナデと思われる。底部では内面で幅の広いヘラミガキ、外面は手持ちヘラ削りを施す。

小鉢 (10・11・12) 10・11は口縁部のみ残存し、内面は横位と縦位のミガキが見られる。外面は10でヨコナデ、11で横位のミガキが確認できる。10・11とも黒色皮膜が部分的に見られ、漆塗布の可能性はある。12は手握ね土器である。外面には指頭圧痕が見られ、内面は工具によるナデが確認できる。

甌 (13) 口縁部～体部上位が残存する。調整は不明瞭であるが、口縁部はヨコナデと思われる。体部内面は削りを行い、外面ではハケメが見られる。

縄文土器

鉢 (14・15) 14は破片のみが残存する。外面には波状の凹線文が施され、内面には条痕が見られるが、雑にナデ消しているようである。胎土には多量の滑石片が含まれ、滑らかな器面を呈する。15は深鉢の底部と思われる。内外面とも指頭圧痕が見られる。

その他

焼土塊 (16) 板状原体角部の圧痕が見られる。

3S1005a 出土遺物 (fig. 17, PL. 10-2, CD写真67)

土師器

小甕 (1) 口縁部～体部上位が残存する。口縁部の端部～外面はヨコナデで調整する。口縁部～体部内面では削りが見られ、体部外面では手持ちヘラ削りを行う。

3S1005i 出土遺物 (fig. 17, PL. 10-3, CD写真68)

土師器

鉢 (1) 口縁部～体部上位外面はヨコナデで調整する。体部～底部内面では削りを行い、体部中位外面ではハケメが見られ、体部下位～底部にかけて指頭圧痕が確認できる。外面では一部を除き、淡赤色～黒灰色の色調差が見られ、二次焼成を受けた痕跡と思われる。

3S1005j 出土遺物 (fig. 17, PL. 10-4, CD写真69)

弥生土器

無頸壺 (1) 口縁部～体部中位が残存する。調整は不明瞭だが、口縁部の調整はヨコナデと思われる。

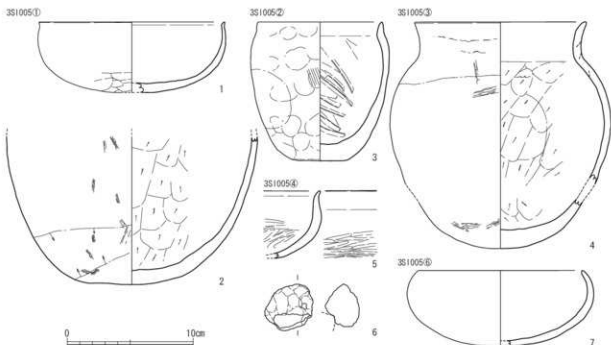


fig. 18 3S1005 出土遺物実測図 (2) (S = 1 / 3) ※○番号は遺構图中番号と一致

3S1005 ①～⑥ (fig. 18, Pl. 9-8, 10-2・5・6, CD写真 65・67・70・71)

土師器

坏 (1・5・7) 1は内面～口縁部外面でナデが見られ、底部外面では手持ちへラ削りが確認できる。口縁部はわずかに屈曲し、内面に平坦部が施される。5は口縁部～底部がわずかに残存する。口縁部～体部上位はヨコナデで調整する。体部中位～底部内外面ではミガキを施す。7は磨耗のため調整不明である。一部に黒色の皮膜が見られ、漆塗布の可能性はある。

甕 (2) 体部中位～底部が残存する。内面では削りを行い、外面はハケメが見られる。体部下位外面では帯状の黒褐色範囲が確認できる。

小甕 (4) 口縁部をヨコナデで調整する。体部～底部内面では削りを行い、外面ではハケメが見られる。所々に粘土紐の痕跡が確認できる。

壺 (3) 口縁部はヨコナデで調整する。体部～底部内面では工具によるナデを行い、また器面にはそれに伴う工具接触痕跡が確認できる。外面では指頭圧後のハケメが見られる。

その他

焼土塊 (6) 板状原体角部の圧痕がみられる。

3S1010 出土遺物 (fig. 19, Pl. 10-7・8, 11-1・2, 12-1, CD写真 72～75・82)

須恵器

坏 (1) 回転ナデ後、底部外面は回転へラ削りを行う。底部内面では同心円の当て具痕が見られる。立ち上がり先端部内面では沈線状の窪みが見られる。

高坏 (2・3) 2は無蓋高坏である。口縁部～体部が残存し、回転ナデで調整する。体部外面には波状文が見られ、口縁部と体部外面の境目には稜が確認できる。3は坏部の底部～脚部が残存する。脚部は回転ナデ後、外面にカキメ調整、また透かしを施す。坏部の底部内面はナデで調整する。

甕 (4) 口縁部がわずかに残存する。回転ナデで調整する。

土師器

高坏 (5) 脚部が残存する。調整は不明であるが、所々に粘土紐の痕跡が見られる。

甕×甌 (8) 把手部と体部内面が残存する。把手部は指頭圧で成形し、体部内面では削りを行う。

甌 (6・7) 体部～底部が残存する。体部内面は削りを行い、底部の端部はヨコナデで調整する。6の体部外面ではヨコナデ、7ではハケメが見られる。

土製品

支脚 (9) 上部がわずかに残存する。横断面の長さ $3.1 + \alpha$ cm、幅 $1.9 + \alpha$ cm、縦断面の高さ $3.5 + \alpha$ cmを測る。横断面の形状は隅丸長方形と思われる。器表面に黒褐色を呈す部分がある。

その他

鉢滓 (10) 長さ 3.05 cm、幅 2.65 cm、厚さ 1.2 cm、重さ 15.3gを測る。気泡状の窪みが全体に見られる。

3S1010a 出土遺物 (fig. 19, Pl. 11-3・8, CD写真 76・81)

土師器

坏 (1) 手捏ねのミニチュア土器である。内外面とも指頭圧痕が見られ、底面はナデ調整である。

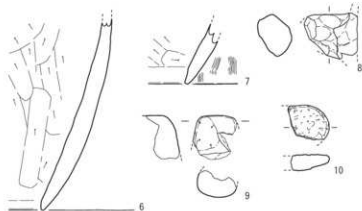
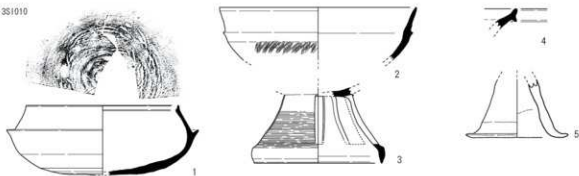
3S1010a 赤褐色土出土遺物 (fig. 19, Pl. 11-4・5, CD写真 77・78)

土師器

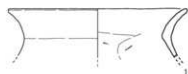
甕 (1) 口縁部～体部上位が残存する。口縁部～体部外面は調整不明である。体部内面は削りを行う。

小甕 (2) 口縁部～体部が残存する。口縁部はヨコナデ、体部内面は削りを行う。体部外面は調整不明である。

3S1010



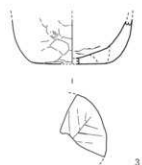
3S1010a赤褐色土



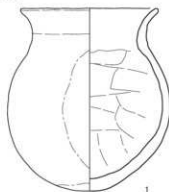
3S1010a暗灰色土



3S1010a



3S1010①



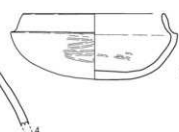
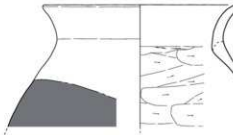
3S1010②



3S1010③



3S1010④



0 10cm

fig. 19 3S1010 出土遺物実測図 (S = 1 / 3) ※○番号は遺構图中番号と一致

鉢（3） 底部が残存する。内面では不定方向のナデが見られ、外面は手持ちヘラ削りを行う。底面では葉脈圧痕が確認できる。

3S1010a 褐色土出土遺物 (fig. 19, PL. 11 - 4・8, CD写真 77・81)

土師器

小甕（1） 口縁部～体部上位が残存する。口縁部はヨコナデで調整する。体部内面は削り、外面はハケメが見られる。内面では帯状の茶褐色範囲が確認できる。

その他

焼土塊（2） 板状原体の圧痕やスサの痕跡が見られる。

3S1010 ①～④ (fig. 19, PL. 11 - 6～8, CD写真 79～81)

須恵器

坏蓋（3） 回転ナデ後、天井部外面は回転ヘラ削りを行う。天井部内面では同心円の当て具痕が見られる。口縁端部内面には沈線状の窪みがあり、天井部と口縁部外面の境には突出した稜が確認できる。

土師器

坏（5） 須恵器坏の模倣坏である。立ち上がり部は回転ナデ、体部内外面はミガキが施される。立ち上がり部～体部上位外面にかけて黒色皮膜がみられ、漆塗布の可能性もある。

甕（4） 口縁部～体部中位が残存する。口縁部内面はヨコナデ、体部内面は削りを行う。他の部位は調整不明である。体部外面では黒斑が見られる。

小鉢（1） 口縁部～頸部をヨコナデ、頸部内面をタテナデで調整する。体部～底部内面では削りを行い、外面は調整不明である。明赤褐色・橙色を呈す体部中位・底部外面は、二次焼成の痕跡と考える。

その他

焼土塊（2） 圧痕が見られる。圧痕周辺は褐茶色を呈し、他の部分は明赤褐色である。

3S1015 出土遺物 (fig. 20, PL. 12 - 2～6, CD写真 83～87)

須恵器

坏（1） 回転ナデ後、底部外面は回転ヘラ削りを行う。立ち上がり端部内面では沈線状の窪みを施す。受け部～底部外面では焼きムラが見られる。

土師器

坏（2・3） 調整は不明瞭であるが、口縁部はヨコナデ、体部～底部は手持ちヘラ削りと思われる。

小鉢（4） 口縁部～体部上位が残存する。ヨコナデ調整後、体部内面はミガキを施し、外面ではハケメが見られる。

甕（5） 体部下位～底部が残存する。底部内面では削りが見られ、他の部位は調整不明である。

弥生土器

高坏×壺（6） 口縁部が残存する。調整は不明瞭であるがヨコナデ調整と思われる。

甕（7） 体部下位～底部が残存する。体部～底部内面はヨコナデ、外面ではハケメが見られる。底部内外面は不定方向のナデで調整する。底部断面では粘土接合の境目が確認できる。

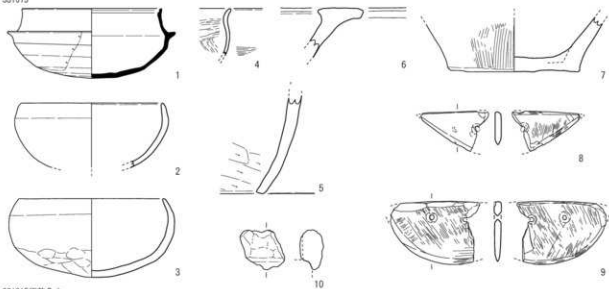
石器

石包丁（8・9） 8は長さ $5.4 + \alpha$ cm、幅 $3.2 + \alpha$ cm、厚さ0.5 cm、重さ10.6gを測る。立岩系の輝緑凝灰岩製である。9は長さ $7.1 + \alpha$ cm、幅4.0 cm、厚さ0.55 cm、重さ33.1gを測る。泥岩製である。

その他

焼土塊（10） 板状原体角部の圧痕が見られる。大部分が橙褐色で、一部黄褐色を呈す。

3S1015



3S1015灰褐色土

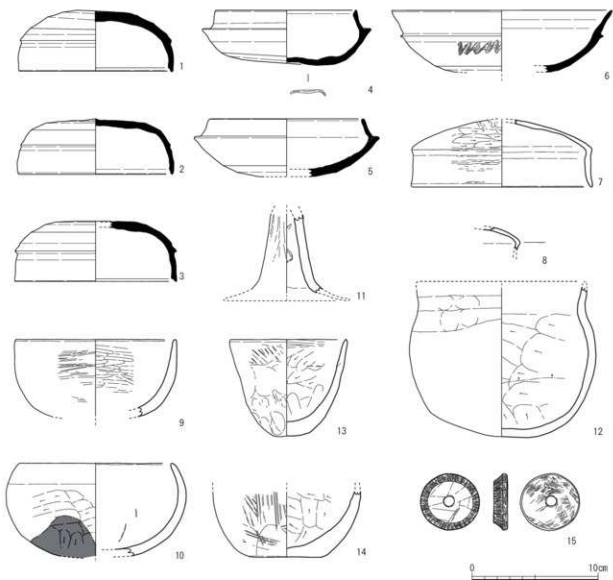


fig. 20 3S1015 出土遺物実測図 (1) (S = 1 / 3)

3S1015 灰茶色土 (fig. 20, PL. 12-7・8, 13-1・2, CD写真 88～91)

須恵器

坏蓋 (1～3) 回転ナデ後、天井部は回転ヘラ削りを行う。口縁部内面は、1・2で沈線状の窪みが見られ、3は斜状を呈し、わずかな段差が確認できる。口縁部・天井部の境目は、1・2で沈線、3では突出した稜が見られる。

坏 (4・5) 回転ナデ後、底部は回転ヘラ削りを行う。4は底部内面で一定方向のナデが見られ、立ち上がり端部は斜状に仕上げ、わずかな段差が確認できる。底部外面にはヘラ記号に似た痕跡が残っている。5は底部内面に湿台痕が見られ、立ち上がり端部は丸く仕上げる。

高坏 (6) 坏部が残存する。回転ナデ後、底部外面は回転ヘラ削りを行う。体部外面には波状文が見られ、口縁部と体部の境目では突出した稜が確認できる。内面に自然釉がかかる。

土師器

坏蓋 (7・8) 7はヨコナデ後、天井部外面で手持ちヘラ削りを行い、その後外面ではミガキを施す。外面では黒色の皮膜が確認でき、漆を塗布した可能性がある。8は天井部付近がわずかに残存する。

坏 (9・10) 9は口縁端部でヨコナデを行い、体部内外面ではミガキを施す。10は口縁部をヨコナデで調整し、体部～底部内面は工具によるナデ、外面は手持ちヘラ削りを行う。体部下位～底部外面では黒斑が見られる。

高坏 (11) 脚部が残存する。内面では工具接触の痕跡見られ、外面は細かい面取りが確認できる。

壺 (12) 口縁端部が欠損する。体部内面では削りを行う。他の部位は調整不明であるが、頭部外面付近は指頭圧痕が残る。内面では上位に暗茶褐色、下位に黄褐色の色調差が見られる。

鉢 (13・14) 13は指頭圧後、口縁部内面～体部外面ではハケメが見られる。体部内面は削りを行い、底部内外面とも指頭圧痕が残る。14は体部下位～底部が残存する。内面は削り、体部外面は指頭圧後

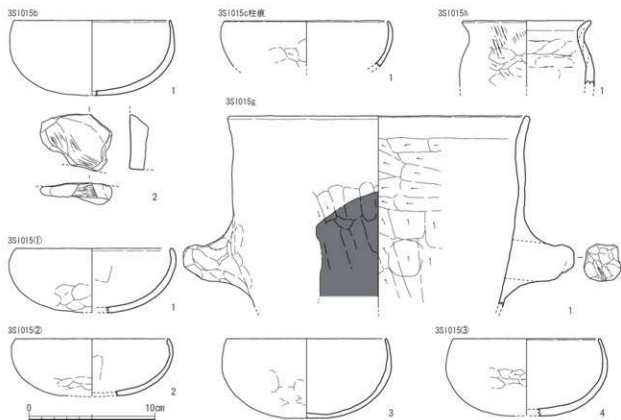


fig. 21 3S1015 出土遺物実測図 (2) (S = 1 / 3) ※○番号は遺構図中番号と一致

のハケメが見られる。底面は工具によるナデが確認できる。

石製品

紡錘車(15) 直径4.65～4.45cm、厚さ1.1cm、重さ38.0gを測り、削りにより成形さる。滑石製である。

3SI015b 出土遺物 (fig. 21, PL. 13-3, CD写真92)

土師器

坏(1) 調整は不明瞭であるが、底部外面は手持ちヘラ削りと思われる。

石製品

砥石(2) 長さ5.7+ α cm、幅4.4+ α cm、厚さ1.6+ α cmを測り、上面・側面に使用痕が見られる。

砂岩製である。

3SI015c 柱痕出土遺物 (fig. 21, PL. 13-3, CD写真92)

土師器

坏(1) 口縁部～体部が残存する。口縁部はヨコナデが見られ、調整は不明瞭であるが体部内面ではミガキ、外面では手持ちヘラ削りを行ったと思われる。

3SI015 g 出土遺物 (fig. 21, PL. 13-4, CD写真93)

土師器

甔(1) 口縁部～体部中位が残存し、把手が付く。口縁部～体部上位外面はヨコナデを行い、体部内外面では削りが見られる。把手部は基部を器面につくられた挿入孔へ差込み、ナデにより貼り付けられる。指頭圧により成形され、先端部では溝状の窪みが確認できる。体部中位外面では黒斑が見られる。

3SI015h 出土遺物 (fig. 21, PL. 13-3, CD写真92)

土師器

壺(1) 口縁部～体部上位が残存する。口縁部は調整不明。体部は指頭圧後、内面をヨコナデ調整し、外面は手持ちヘラ削りを行う。頸部外面ではハケメが見られる。断面には粘土紐の痕跡が残存する。

3SI015 ①～③ (fig. 21, PL. 13-5・6, CD写真94・95)

土師器

坏(1～4) 調整は不明瞭であるが、口縁部はヨコナデ、内面は工具によるナデ、体部下位～底部外面は手持ちヘラ削りを行ったと思われる。

3SI020 出土遺物 (fig. 22, PL. 13-7・8, 14-1～4, CD写真96～101)

須恵器

高坏蓋(1) 天井部が残存する。回転ナデ後、天井部外面は回転ヘラ削りを行う。つまみ貼付けは回転ナデによる。

土師器

坏(6) 手捏ねのミニチュア土器である。指頭圧により成形される。

高坏(2) 坏部はヨコナデ後、体部内面は工具によるミガキを施し、外面では手持ちヘラ削りを行う。脚部はヨコナデで調整される。

壺(3) 口縁部～体部中位が残存する。口縁部内面ではハケメが見られ、体部内面では削りを行う。外面は調整不明である。

鉢(4・5) 4は口縁部でヨコナデが見られ、体部内面は削りを行う。底部内面ではナデ、体部下位～底部外面でハケメが見られる。口縁部～体部中位内面に暗灰茶色範囲が確認できる。5は口縁部～体部が残存する。口縁部ではヨコナデが見られ、体部内面は工具によるナデを行う。体部外面は手持ちヘラ削り・ハケメが確認できる。

甔 (7・8) 7は口縁部でナデ調整が見られ、体部～底部内面・体部下位～底部外面は削りを行う。口縁部～体部中位外面ではハケメが見られ、体部下位では指頭圧痕が残る。体部外面で黒斑が確認できる。8は体部下位～底部が残存する。体部内面は削りを行い、外面では指頭圧後のハケが見られる。底部の端部はヨコナデにより調整される。内面では上位に茶褐色、下位に褐橙色の色調差が見られる。

弥生土器

甕 (9・10) 調整は不明瞭であるが、ヨコナデと思われる。所々に丹塗りの痕跡が確認できる。

縄文土器

不明 (11) 小破片のため器種は不明である。ナデ調整され、外面には凹線を施す。端部では粘土貼り付けの痕跡が確認できる。滑石片を多量に含む。

石器

リタッチドフレーク (12) 長さ4.15cm、幅2.85cm、厚さ1.2cm、重さ10.0gを測る。先端部～片側面に刃部を作り出している。黒曜石製である。

石包丁 (13) 長さ6.0+αcm、幅4.8+αcm、厚さ0.5cm、重さ16.5gを測る。砂岩製で、片面に光沢範囲を確認できる。

3S1020a 出土遺物 (fig. 22, PL. 14-4, CD写真101)

その他

焼土塊 (1) 板状原体の圧痕と思われる平坦部がある。

3S1020 ②～⑦ (fig. 23, PL. 14-5～8, 15-1, CD写真102～106)

土師器

坏 (4) ヨコナデ後、口縁部～内面にかけてミガキを施す。体部～底部外面では手持ちヘラ削り後の

3S1020

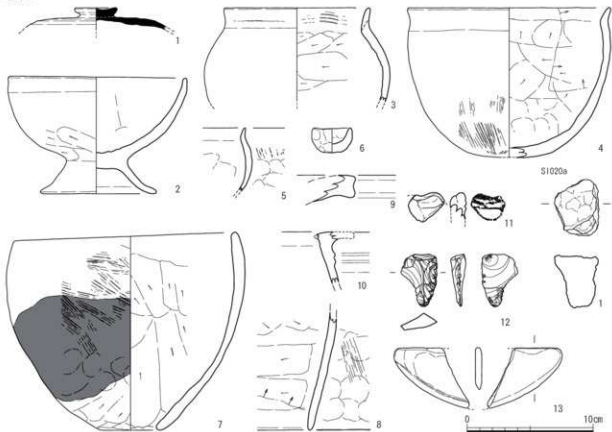


fig. 22 3S1020 出土遺物実測図 (1) (S = 1/3)

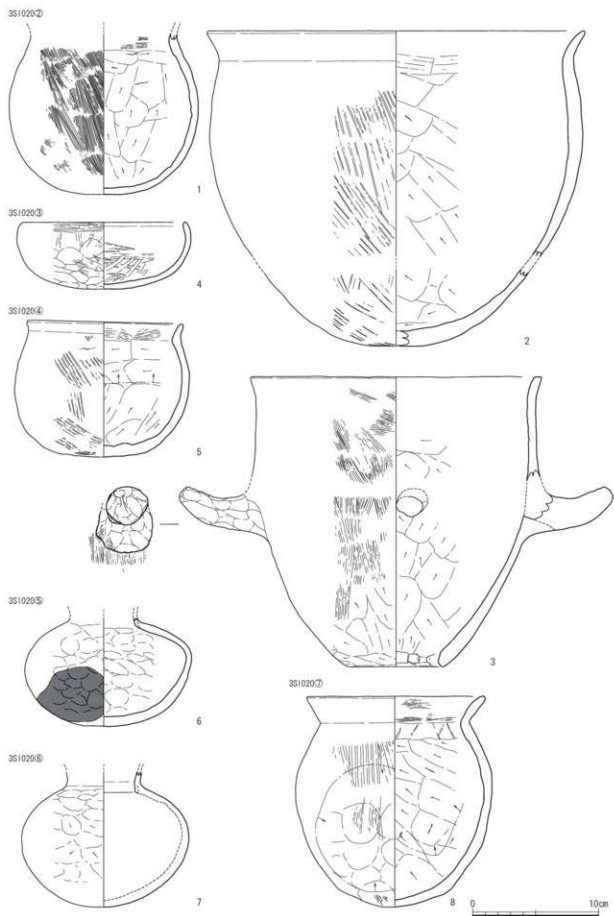


fig. 23 3S1020 出土遺物実測図 (2) (S = 1 / 3) ※○番号は遺構図中番号と一致

ハケメが見られる。内面一部では黒色の皮膜が見られ、漆を塗布した可能性がある。

甕(2) 口縁部はヨコナデ、口縁部～頸部内面・体部～底部外面ではハケメが見られる。体部～底部内面は削りを行う。

小甕(1・8) 1は口縁部が欠損し、体部～底部内面は削り、頸部内面・体部～底部外面ではハケメが見られる。また、頸部内面で粘土紐の痕跡が確認できる。8は口縁部外面にヨコナデ、内面でハケメが見られる。体部～底部内面は削り、外面では指頭圧後のハケメが確認できる。また、内面は暗茶褐色、外面では赤褐色の色調差が見られ、二次焼成の痕跡と思われる。

壺(6・7) 口縁部はヨコナデ、体部～底部外面は手持ちヘラ削りを行う。体部～底部内面は指頭圧後のナデで調整する。6の体部外面では黒斑が見られる。

鉢(5) 口縁部はヨコナデ後、内面ではハケメが見られる。体部～底部内面は削り、外面はハケメが確認できる。内面では上位に暗灰茶色、下位に淡橙色の色調差が見られる。

甌(3) 口縁部はナデで調整し、体部～底部内面は削りを行う。体部外面はハケメ、底部外面～底部では削りが見られる。把手部は指頭圧により成形され、器面につくられた挿入孔へ差込まれている。把手先端部には溝状の窪みが確認できる。

3S1030 出土遺物 (fig. 24, PL. 15 - 2・3, CD写真 107・108)

弥生土器

甕(1~4) 口縁部・体部上位が残存する。調整は不明瞭であるがヨコナデと思われる。3・4の胎土中央は黒灰色を呈する。

壺(5) 体部上位が残存する。調整は不明である。

(3) 土坑

3SK025 出土遺物 (fig. 25, PL. 15 - 4, CD写真 109)

土師器

坏(1・2) 口縁部はヨコナデ調整し、体部内面は工具によるナデ、体部外面は手持ちヘラ削りを行う。2では体部外面に手持ちヘラ削り後のハケメが見られる。

縄文土器

粗製深鉢(3) 体部下位～底部が残存する。調整は不明である。

3SK052 出土遺物 (fig. 25, PL. 15 - 5・6, CD写真 110・111)

縄文土器

深鉢(1・2) 1は口縁部～体部上位、2は体部下位～底部が残存し、両遺物は一個体である。1は内外面ともに横方向の条痕が見られ、2では体部下位内面に縦方向の条痕、外面に不定方向の条痕が確認できる。底部の内外面は不定方向のナデ調整を行う。2の断面では底部と体部の接合痕跡が見られる。底部外面は凸状になる。

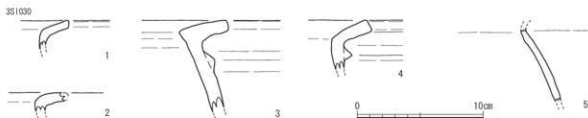


fig. 24 3S1030 出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

(4) その他の遺構

3SX002 暗茶色土出土遺物 (fig. 25, Pl. 15 - 7, CD写真112)

須恵器

坏蓋 (1) 口縁部が残存し、回転ナデで調整する。先端部は斜状に成形し、沈線状の窪みをつける。

高坏 (2) 脚部が残存する。回転ナデ後、脚部外面にカキメ、また透かしを施す。

甕 (3) 口縁部～頸部が残存する。回転ナデで調整し、断面では口縁部・体部の接合痕跡が見られる。

土師器

甕×甔 (4) 把手部・体部内面が残存する。把手部は指頭圧で成形され、先端部では溝状の窪みが見られる。器面への接合はナデ、体部内面では削りを行い、把手部先端～下部にかけて黒斑が確認できる。

その他

鉢滓 (5) 長さ6.6cm、幅5.6 + αcm、厚さ2.4cm、重さ70.1gを測る碗型滓である。側面には炉壁が付着する。

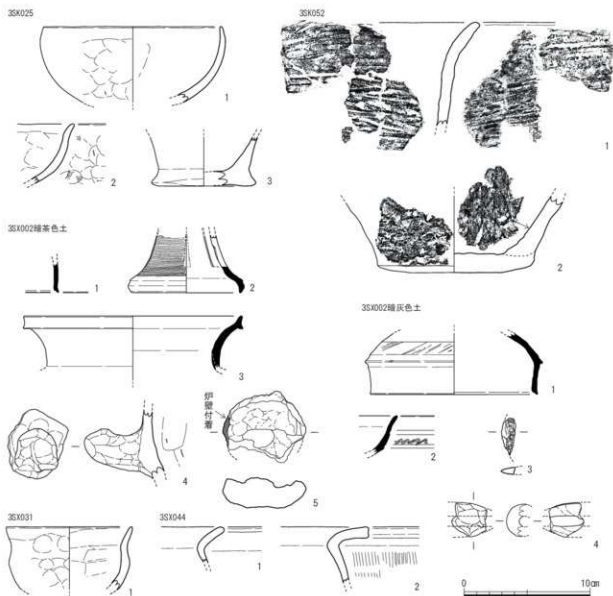


fig. 25 3SX025・052、3SX002・031・044 出土遺物実測図 (S = 1 / 3)

3SX002 暗灰色土出土遺物 (fig. 25, PL. 15 - 8, 16 - 1, CD写真 113・114)

須恵器

坏蓋 (1) 回転ナデ調整後、天井部外面は手持ちへら削りから回転へら削りの順で調整を行う。口縁端部は斜状に成形し、わずかに段差が見られる。

高坏 (2) 口縁部へ体部が残存する。回転ナデ後、体部外面では2条の沈線・波状文を施す。

石製品

板状製品 (3) 長さ2.95 cm、幅1.1 cm、厚さ0.55 cmが残存し、重さ2.1 gを測る。削りによる加工痕が見られる。滑石製である。

土製品

土錘 (4) 推定で直径約2.6 cm、穿孔径約0.9 cm、重さ8.4 gを測り、わずかに残存する。外面は調整が不明瞭であるが、ナデ調整と思われる。穿孔内面では縦方向の条痕が確認できる。

3SX031 出土遺物 (fig. 25, PL. 16 - 2, CD写真 115)

土師器

小鉢 (1) 調整は不明瞭であるが、口縁部はヨコナデ、口縁部へ体部内面は工具によるナデ、体部外

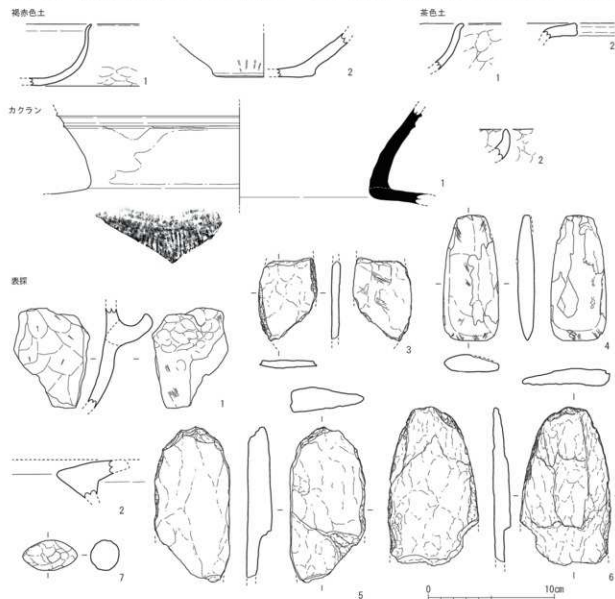


fig. 26 褐赤色土・茶色土・カクラン・表探出土遺物実測図 (S = 1/3)

面は手持ちへら削りを行ったと思われる。また、頸部外面では指頭圧痕が見られる。

3SX044 出土遺物 (fig. 25, PL. 16-3, CD写真 116)

弥生土器

甕 (1・2) 口縁部へ体部上位が残存する。1は調整不明である。2はヨコナデ後、体部上位でハケメが見られる。

褐赤色土出土遺物 (fig. 26, PL. 16-4, CD写真 117)

土師器

坏 (1) 口縁部へ底部がわずかに残存する。底部外面は削りを行う。他の部位は調整不明である。

弥生土器

壺 (2) 体部下位へ底部が残存する。内面は不定方向のナデ、体部下位外面ではハケメが見られる。底部外面はヨコナデで調整し、底面部は調整不明である。

茶色土出土遺物 (fig. 26, PL. 16-4, CD写真 117)

土師器

坏 (1) 口縁部へ体部上位が残存する。口縁部はヨコナデで調整し、体部内面は工具によるナデが見られる。体部外面は手持ちへら削りを行う。

弥生土器

甕 (2) 口縁部が残存し、ヨコナデで調整する。

カクラン出土遺物 (fig. 26, PL. 16-5・6, CD写真 118・119)

須恵器

甕 (1) 頸部へ体部上位が残存する。頸部はヨコナデで調整し、凸帯部を成形する。体部上位は外面に平行叩きの痕跡が見られ、内面ではヨコナデにより当て具痕をナデ消していると思われる。

土師器

坏 (2) 手捏ねのミニチュア土器である。全体に指頭圧痕が見られる。

表探遺物 (fig. 26, PL. 16-7・8, CD写真 120・121)

土師器

甕×甔 (1) 把手部・体部中位が残存する。把手部は指頭圧で成形し、ナデにより器面への接合を行う。体部内面は削り、外面ではハケメが見られる。

弥生土器

甕棺 (2) 口縁部が残存する。調整は不明である。胎土中央は黒灰色を呈する。

石器

磨製石斧 (4) 長さ 9.95c m、幅 4.4c m、厚さ 1.4c m、重さ 92.5g を測る。蛇紋岩製である。

打製石斧 (3・5・6) 3は長さ 6.15 + α c m、幅 4.6c m、厚さ 0.65c m、重さ 32.1g。5は長さ 12.3 + α c m、幅 5.9c m、厚さ 1.9c m、重さ 188.9g。6は長さ 12.55 + α c m、幅 7.1c m、厚さ 1.2c m、重さ 166.2g を測る。基部から側面では細かい調整が見られるが、5は一方の側面が未加工なため未製品である可能性が高い。全遺物とも片岩製である。

土製品

投弾型土製品 (7) 長さ 4.35c m、幅 2.4c m、重さ 17.8g を測る。ナデにより成形される。

第4章 まとめ

今回の調査では3面の遺構面を確認し、縄文～古墳時代の櫛列・住居跡・土坑を検出した。周辺の遺跡においても同様な遺構が見られ、集落の変遷を考える上で貴重な調査成果であると考えられる。ここでは各検出面ごとに遺構・遺物を検証し、本遺跡の総括を行う。

第一遺構検出面

3S1015、3SX044を検出した。3S1015では小田富士雄氏の須恵器編年（以後小田編年と略号する）におけるⅡ～Ⅲ期の坏蓋・坏身が出土している。このことから第一遺構検出面はⅢ期以前に形成されたと考えられる。3SX044は弥生土器片しか出土していないが、調査区壁面土層の層序関係からⅢ期以降のものだと判断する。

第二遺構検出面

検出した遺構は3SA045・050、3S1005・010・020・030、3SK025で、3S1030のみ弥生時代、他は古墳時代の遺構である。

3S1030では須玖Ⅱ式の弥生土器が出土しているが、須恵器や土師器の破片もわずかに確認できたため後世に入り込んだ可能性がある。しかし、本調査区から出土している弥生土器は、ほとんどが須玖Ⅱ式の土器であるため、3S1030の遺構時期は弥生時代中期後半である可能性が高い。

古墳時代の遺構の切り合い関係は

3S1020（・3SK025）→3S1010（・3SK025）→3SA050→3S1005・3SA045

となっている。3S1010では床面直上から小田編年Ⅱ期の須恵器の坏蓋が出土しており、この遺構と第一遺構検出面の時期を基準に考えると、3S1005・010・050はⅡ期に位置付けられる。3S1010に切られる3S1020はⅡ期またはそれ以前となるが出土土器の様相に目立った違いが見られないため、3S1010とはほぼ時期差はないと考える。3SK025は3S1010・020との前後関係は不明なため、小田編年Ⅱ期以前またはⅡ期と思われる。3SA045は第二遺構検出面の遺構であるが、それは第一遺構検出面である灰茶色土のない場所において検出されたためであり、第一遺構検出面の遺構の可能性もある。したがって、3SA045の時期は小田編年Ⅱ期以降と言える。

以上の状況から、第二遺構検出面は弥生時代に形成され、古墳時代後期（小田編年Ⅱ期）に埋没したと考えられる。

第三遺構検出面

第三遺構検出面は地山であり、3SK052を検出した。3SK052では縄文土器の粗製深鉢が出土しており、遺構の埋没時期は縄文時代後期と思われる。

縄文時代の遺物は他遺構からも出土している。3S1005・020では胎土に多量の滑石片を含み、凹線文を施した土器が出土しており、これらの特徴から縄文時代中期の阿高式土器系の可能性がある。3SK025出土土器は底部の破片で、その形状から縄文時代晩期の黒川式土器系と考える。また、表採であるが磨製石斧1点・打製石斧3点を発見している。

縄文時代の遺構は3SK052以外確認されなかったが、本調査地より東の平野部に位置する御笠地区遺跡では黒川式土器並行期である土器が出土しており、さらに東の宮地岳に所在する阿志岐シメノグチ遺跡においても同時期の住居跡が検出されている。これらの状況を踏まえると、本遺跡周辺でも縄文時代後期以外に晩期の遺構も展開していたと思われる。また、表採の打製石斧には刃部が欠損したものや未製品のものが見られ、当時の生活空間が近くに存在していた可能性を示していると考えられる。

今回の調査における主要な遺構は住居跡であり、5軒を確認した。1軒は弥生時代中期後半の住

居跡と思われ、4軒は5世紀後半～6世紀中頃の遺構である。この内3S1010・020は焼失住居であり、3S1010では切り合う遺構の年代から建築して短期間で火災にあったと考えられる。また、今回の調査で検出された遺構は、周辺で発掘調査された吉ヶ浦遺跡第1次調査・袖ノ木遺跡に関連すると思われる、弥生時代中期後半～後期初頭の甕棺墓・木棺墓群、古墳群被葬者と繋がりを持つ集落であった可能性が考えられる。

古墳時代集落の様相

今回調査した4軒の古墳時代の住居跡は小田編年Ⅱ期またはそれ以前～Ⅲ期に比定されると思われる。太宰府市内において、同時期の集落遺跡は希少であるため住居跡の様相がつかめない。したがって、太宰府市周辺の市町村の集落遺跡を集成し（tab. 1～3）、小田編年ⅠB～Ⅲ期の住居跡の様相を検証してみる。

住居面積は小田編年ⅠB～Ⅲ期の住居跡が多数検出された集落遺跡である筑紫野市貝元遺跡を例に挙げて検証を試みる。住居跡一覧表(tab. 2)を見てみると大まかに17㎡～20㎡前後・25㎡～28㎡前後・30㎡以上の住居跡が多く3段階程度に分かれている可能性が考えられる。この状況は貝元遺跡の住居跡のいずれの時期にも当てはまるようで、集落内の階層を示している印象を受ける。住居跡の数が少ない遺跡もあるが、他の遺跡においても近い面積数値の住居が多数が見られ、貝元遺跡と同じような状況が展開すると思われる。また、例外的に10㎡前後（野黒坂遺跡・貝元遺跡・松木遺跡）、40㎡以上（野黒坂遺跡・大曲り遺跡）の住居跡も見られるが、それらは使用目的や建築構造の違いである可能性が考えられる。

次に住居内施設について検証してみる。壁溝を設置する住居跡は、丘陵に所在する吉ヶ浦遺跡第3次調査区・野黒坂遺跡・大曲り遺跡・松木遺跡と宝満川沿いの岡田地区遺跡で見られる。壁溝には底面に多数のピットがある遺構とない遺構があり、壁面補強材の固定や排水のために設置するといわれている。吉ヶ浦遺跡第3次調査区では壁溝底面には多数のピットは見られず、設置位置は調査区内地形の高い場所から低い場所に造られた住居跡内壁面に沿って見られる。また、野黒坂遺跡は北地区・南地区と調査区が分かれており、傾斜のある北地区のみに壁溝を有する住居跡が検出されている。したがって、用途としては雨水や伏流水の流れ込みに対応した排水溝である可能性が高い。岡田地区遺跡の住居跡では壁溝底面に多数のピットが見られる。この遺跡は砂礫層を基盤とし、その上層に堆積する淡黄褐色粘質土が遺構検出面となっている。基盤層が砂礫層であれば透水性がありそうだが、崩壊しやすい地質であれば壁溝は堅穴壁面補強材を固定するために設置されたものと考えられる。これらの状況を見ると時代や地域

吉ヶ浦遺跡第3次調査(太宰府市)

時期	遺構名	面積(㎡)	カマド		壁溝	備考
			構造	支脚		
ⅠB～Ⅱ期?	3S1020	22.325	焚口部が石組み		○?	
	3S1010	18.225		壘	○	・土製支脚片出土
Ⅱ期	3S1005	19.98		石	○	
	3S1020	30.24		石	○	

野黒坂遺跡(筑紫野市)

時期	遺構名	面積(㎡)	カマド		壁溝	備考
			構造	支脚		
Ⅱ～Ⅲ期	30号住居跡	27.1425			○	・カマドなし・土師器模倣灰葺4 坯身3出土
	3号住居跡			石		
	5号住居跡			石	○	
	7号住居跡			石		
	9号住居跡	16.119				
	13号住居跡	12.845				
	14号住居跡	43.754			○	
	15号住居跡	7.344		石・壘		
	20号住居跡	17.716		石	○	・土師器模倣坯身1出土
	25号住居跡	23.221			○	
ⅢA期	28号住居跡	29.686		石	○	
	34号住居跡	18.81		土製		
	41号住居跡	34.224		石		・土師器模倣灰葺2 坯身1出土

tab. 1 太宰府市周辺遺跡出土住居跡一覧表(1)

大曲り遺跡(筑紫野市)

時期	遺構名	面積(m ²)	カマド			備考
			構造	支脚	壁溝	
I B期	3号住居跡	24.3			○	・カマドなし
	1号住居跡	64.74			○	
II～III期	6号住居跡			石	○	
	7号住居跡	20.16		石	○	

貝元遺跡(筑紫野市) [註4]

時期	遺構名	面積(m ²)	カマド			備考
			構造	支脚	壁溝	
I B期	81号住居跡	26.2				
	113号住居跡	28.5		石		
	121号住居跡	35.0	焚口部が石組	石		
	123号住居跡			石		
	262号住居跡	30.0				
	345号住居跡	36.0				
I B～II期	3号住居跡	14.6		石		
	SC89	10.26		石		
II期	126号住居跡			石		
	28号住居跡	18.8		石		
	74号住居跡	17.9				
	92号住居跡		カマド袖部に立石			
	176号住居跡	25.9	焚口部が石組			
	232号住居跡	24.0				
III A期	393号住居跡	18.3				
	93号住居跡	18.6				
	117号住居跡	28.6	焚口部が石組	石		・土師器横做坏蓋2 坏身3出土 ・カマドが竪穴角部に設置
	168号住居跡	26.0	焚口部が石組	石		
	265号住居跡	16.0				
	302号住居跡	33.2				
	339号住居跡	22.9	カマド袖部に立石			
	407号住居跡	32.7				
412号住居跡	32.5					
III B期	SC68	25.0				・土師器横做坏蓋2 坏身3出土 ・カマドなし ・土師器横做坏蓋2 坏身5出土
	88号住居跡	19.3				
	120号住居跡	23.3		高坏		
	422号住居跡	27.4		高坏?		

岡田地区遺跡(筑紫野市)

時期	遺構名	面積(m ²)	カマド			備考
			構造	支脚	壁溝	
II期	SC3	25.0		土製	○	
	SC4	29.64			○	
	SC9	24.52			○	・土師器横做坏蓋10 坏身9出土

裏ノ田遺跡(大野城市)

時期	遺構名	面積(m ²)	カマド			備考
			構造	支脚	壁溝	
II期	第13号住居跡	16.6		土製		
	第22号住居跡	16.0		高坏		
III A期-1	第1号住居跡	13.0		石		・裏ノ田遺跡ではIII A期を2期に分けている。
	第2号住居跡	18.0				
	第4号住居跡	19.0		土製		
	第9号住居跡	26.7		土製		
III A期-2	第3号住居跡	31.6		土製		
	第7号住居跡	21.8				
	第20号住居跡	24.0		土製		

松木遺跡(那珂川町)

時期	遺構名	面積(m ²)	カマド			備考
			構造	支脚	壁溝	
I B期	4号竪穴住居跡					
	9号竪穴住居跡	26.0				
	10号竪穴住居跡			石		
	12号竪穴住居跡	34.22		土製?		
	13号竪穴住居跡	33.5				
	17号竪穴住居跡	19.2		粘土柱・高坏		
II期	5号竪穴住居跡				○	
	6号竪穴住居跡	28.62				
	20号竪穴住居跡	11.56		石		
II～III A期	15号竪穴住居跡	28.82		石		
	31号竪穴住居跡	25.5				
III A期	3号竪穴住居跡	17.6		石		
	8号竪穴住居跡	27.3				
	18号竪穴住居跡	21.28				・カマド祭祀か?
	19号竪穴住居跡	24.5		壘石		
	23号竪穴住居跡	20.3				
	30号竪穴住居跡	15.2		石		

tab. 2 太宰府市周辺遺跡出土住居跡一覧表(2)

円入遺跡(春日市)

時期	遺構名	面積 (㎡)	カマド		壁溝	備考
			構造	支脚		
ⅠB期	2号住居跡	17.43		壺?		・カマド祭祀か?
	3号住居跡	14.66				
	4号住居跡	25.11		壺?		・カマド祭祀か?
ⅢA期	5号住居跡	15.19		石		

tab.3 太宰府市周辺遺跡出土住居跡一覧表 (3)

に限定されたものではなく、地形や地質にあわせて設置されたと考えるのが自然である。

カマド施設について検証をしてみる。裏ノ田遺跡では土製支脚の使用が多く、他の遺跡では石製支脚が圧倒的に多い。裏ノ田遺跡の集落は同遺跡で検出された須恵器窯に関連すると考えられており、このことが土製支脚を使用している点と関わり合っている可能性がある。

カマド焚口部を石組みにしている住居跡は、吉ヶ浦遺跡第3次調査区・貝元遺跡・大曲り遺跡で見られる。石組のカマドは、カマド出現期に相当する住居群を検出したときは市(旧吉井町)塚堂遺跡で多数見られ、その地域の影響を受けている可能性がある。また、土師器の模倣坏の出土例は吉ヶ浦遺跡第3次調査区・貝元遺跡・野黒坂遺跡・岡田地区遺跡で確認されており、石組み焚口部カマドの分布域とおおよそ一致している。これらの分布域は、脊振山系である天拝山と高雄丘陵が挟む狭小な平野部を境界線とした南の地域で広がっているようである。

これらの検証結果をまとめてみると、住居面積は集落内においてランクが3段階程度に分かれるようである。吉ヶ浦遺跡第3次調査区例では3S1005-010-020が17～20㎡前後、3S1015は30㎡以上になり、前者は第二遺構検出面、後者は第一遺構検出面に相当する。狭小な調査区内で見られたこの状況は、整地後に集落内の配置替えを行ったという印象を受ける。住居内施設は建設地の地形地質または住居跡関連遺構による違いがあることは当然のこととして、吉ヶ浦遺跡第3次調査区でも確認した石組み焚口部のカマドと土師器模倣坏の分布がほぼ一致しているという状況が見られた。このことは文化圏の範囲を示していると考えられ、吉ヶ浦遺跡第3次調査区は南部の文化圏に含まれていると考えられる。

初期須恵器と土師器模倣坏について

吉ヶ浦遺跡第3次調査ではすでに上記したように住居跡から土師器の模倣坏が出土した。土師器模倣坏は小田編年Ⅱ期頃から出現し、矢部川・筑後川流域を中心に多く出土する傾向があり、このことに関しては、朝倉古窯群の操業終了に伴う須恵器供給減退を補填するために土師器模倣坏が生産されたという見解がある。(註1) また、本調査では流れ込みの遺物であるが住居跡から小田編年ⅠB期と思われる須恵器の坏が出土しており、大阪陶邑窯跡産の可能性があると御指摘を受けた。福岡県内の5世紀代の古墳出土遺物で陶邑窯跡産須恵器と判断された事例は少ないながらも報告されており、本調査地に近い遺跡としては筑紫野市平原2号墳がある。また、そこから近い天神遺跡でも小溝から陶邑窯跡産須恵器とされる甕が出土している。ここで問題になるのは、陶邑窯跡産の流通の範囲と時期である。(註2) また、須恵器の補填器と思われる土師器模倣坏との関わり合いも興味深い。

したがって、陶邑窯跡産須恵器が出土した福岡市立花寺遺跡6次A-1区や立花寺遺跡に近い時期の須恵器が出土している太宰府市尾崎遺跡第1次調査、また土師器模倣坏が多量に出土した岡田地区遺跡群Ⅰ区の遺物出土状況を検証してみる。遺物の出土状況を公平に比較するために出土遺構は溝に統一した。それぞれの溝の長さは、立花寺遺跡で約60m、尾崎遺跡で約70m、岡田地区遺跡では約170mを測る。

福岡市立花寺遺跡では、小田編年ⅠB～Ⅱ期の須恵器が多量に出土しており、須恵器の胎土分析では試料16点中8点は大阪陶邑産という結果が出ている。また、立花寺遺跡の溝(SD14)では土師器・須

遺跡名	遺構名	土師器出土点数					須恵器出土点数					出土総数
		坏	模倣坏蓋・身	高坏	壺	その他	坏蓋	坏身	高坏	壺	その他	
立花寺遺跡6次A-1区	SD14	127(32)	0	66(16)	52(13)	53(13)	12(3)	18(4)	22(6)	18(5)	32(8)	400
尾崎遺跡第1次調査区	SD01	86(64)	0	12(9)	2(2)	18(13)	7(5)	6(5)	0	0	3(2)	134
岡田地区遺跡群1区	SD50	39(45)	16(19)	6(7)	13(15)	9(11)	0	2(2)	0	1(1)	0	86

tab. 4 溝出土遺物割合表

恵器が多量に出土しており、両種類の出土量の割合は土師器74%、須恵器26%である。これに対し、同時期の遺構である太宰府市尾崎遺跡第一次調査区の溝(SD01)では土師器88%、須恵器12%の割合である。また、岡田地区遺跡群1区の溝(SD50)の遺物出土状況は土師器97%、須恵器3%と須恵器の出土量が極端に少ない。(tab. 4) (註3)

3遺跡の遺物出土状況を検証すると、福岡平野を南下するに従い、須恵器の出土量の割合が少なくなっているようである。また、遺物出土総数も溝の検出範囲には比例せず、北から南にかけて減少している傾向が見られた。岡田地区遺跡は、須恵器の出土量は非常に少なく、土師器模倣坏が多量に出土している。吉ヶ浦遺跡第3次調査区の住居跡でも土師器の使用量が圧倒的に多い状況が見られる。

以上のような須恵器の出土状況や出土量を観察すると小田編年I B～II期における大飯陶邑産須恵器の流通範囲は福岡平野北部に集中している印象を受ける。また、筑後平野またはその付近に位置する岡田地区遺跡・吉ヶ浦遺跡第3次調査区では土師器を中心として使用しており、岡田地区遺跡の土師器模倣坏が住居跡や溝でも多量に出土している状況は、前述した須恵器の補填とする役割で使用されていたことを裏付けるように思える。しかし、小田編年III期に入ると南部の地域でも須恵器の使用数量が増加する傾向にあり、牛頭窟跡群や小郡市苅又窟跡群の操業開始が関連していると考えられている。(註1) 吉ヶ浦遺跡第3次調査区でも小田編年III期に入ると須恵器使用数量が増加するようであり、小田編年II期とする3S1005・010では坏蓋が1点ずつ見られ、小田編年III期とする3S1015では坏蓋が3点、坏身が2点出土した。また、陶邑産須恵器の流通量は牛頭窟跡群や苅又窟跡群の出現により減少傾向になる可能性が考えられるが現段階では推測の域を出ない。

今回は太宰府市周辺の集落遺跡で検証を行ったが、さらに数多くの事例と広い範囲における分析が必要であり、遺物に関しても細かい観察から地域性が窺える可能性は高く、今後の課題としたい。

出土焼土塊について

本遺跡の古墳時代の住居跡では焼土塊が出土し、中でも3S1010に多く見られた。(tab. 5) 3S1010の出土状況は、カマド内埋土から比較的大きい破片が確認でき、中には板状の圧痕が見られるものがある。焼土塊はカマドの破片が構築材に伴う粘土や土壁が火災によって焼土化したものかは判断しがたいが、カマド残存部と土質の違いや板状の圧痕が見られることから構築材の粘土であると考える。また、すでに遺構の章で説明した被熱範囲と大きい焼土塊の出土状況を関連させると、カマド近くの構築材の粘土または土壁が火災により強く熱を受け焼土化したと考えられ、出火地点はカマドの北側の被熱範囲であると推測できる。しかし、同じく焼失住居とする3S1020では少量しか出土しておらず、住居構造の違いが出土量に差をつけている可能性が考えられる。

3S1005・015は火災の痕跡は見られなかったが、焼土塊は出土している。これらの中にも板状の圧痕が確認できるものがあり、構築物の粘土や土壁である可能性はある。しかし、焼失住居ではない遺構から焼土塊が出土していることについては、埋没する際に他から混入したか、もしくは日常生活で焼土化するほど熱を受ける構築部分が合ったかなどの点を検証する必要がある。

住居建築において粘土を行う場合は、土壁や土で覆った草葺屋根等の構造が考えられるが、今回の焼土出土状況からは住居構造を見出すことはできなかった。

S-5

採回番号	図版番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	圧痕	スサ
fig.17-16	PL.9-8	R-004	4.8	3.65	2.2	22.2	○	

S-5(35)

採回番号	図版番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	圧痕	スサ
	PL.10-1	R-003	3.3	2.3	1.6	9.7		
	PL.10-1	R-004	3.5	3.2	2.5	20.0		

S-5

採回番号	図版番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	圧痕	スサ
	PL.9-8	R-015	2.9	2.5	1.9	9.18		

S-5(4)

採回番号	図版番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	圧痕	スサ
fig.18-6	PL.9-8	R-006	3.8	3.5	2.7	23.4	○	

S-10

採回番号	図版番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	圧痕	スサ
	PL.12-1	R-011	2.6	2.15	1.7	6.8		
		R-012	3.6	2.1	1.5	6.9		
		R-013	3.8	3.6	2.6	25.1		
		R-014	2.95	2.2	1.8	7.4		
		R-015	4.5	2.95	2.15	22.7		
		R-016	2.85	2.4	1.4	8.3		
		R-017	2.8	2.4	2.2	11.4		
		R-018	3.2	2.5	1.7	8.8		
		R-019	3.0	2.5	1.7	8.3		
		R-020	2.2	1.9	1.05	2.8		

S-10a

採回番号	図版番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	圧痕	スサ
	PL.11-8	R-002	3.6	2.7	2.3	17.8		

S-10a焼灰土

採回番号	図版番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	圧痕	スサ
fig.19-2	PL.11-8	R-002	3.8	3.8	1.6	17.1	○	○
		R-003	5.5	4.95	3.5	66.7		
		R-004	2.6	1.8	1.5	3.4		
		R-005	3.8	3.1	2.8	27.4		
		R-006	3.5	2.6	1.8	10.6		

S-10(1)~(4)

採回番号	図版番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	圧痕	スサ
fig.19-2	PL.11-8	R-002	2.95	1.85	1.8	6.0	○	
		R-006	5.6	5.1	3.9	57.4		
		R-007	2.5	2.1	1.6	6.3		

S-15

採回番号	図版番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	圧痕	スサ
fig.20-10	PL.12-6	R-010	3.1	3.1	1.85	16.4		
		R-011	5.75	3.5	1.8	32.3		
		R-012	3.1	2.2	1.7	9.7		
		R-013	2.4	2.3	1.75	7.0		
		R-014	3.35	2.2	1.7	9.0		

S-15灰白色土

採回番号	図版番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	圧痕	スサ
	PL.12-6	R-001	3.3	2	1.7	8.3		

S-20

採回番号	図版番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	圧痕	スサ
	PL.14-4	R-014	2.5	2	1.8	7.3		

S-20a

採回番号	図版番号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	圧痕	スサ
fig.22-1	R-001	4.45	3.5	4.1	49.1	○		

tab. 5 吉ヶ浦遺跡第3次調査 焼土塊計測表

(注 1) 重藤輝行(福岡県教育委員会)「福岡県における古墳時代中期～後期の土師器」

【第5回九州前方後円墳研究会 古墳時代中・後期の土師器-その編年と地域性-発表要旨資料】

第5回九州前方後円墳研究会実行委員会・九州国立博物館談話推進本部 2002年

(注 2) 陶色窯跡産須志器の御形模、陶色窯跡産須志器流通の問題とは石木秀徳氏(大野城市教育委員会)の御教示による。

(注 3) 出土量の数値は各報告書に掲載されている遺物のみを使用した。

(注 4) 貝元遺跡の遺構において「○号化原跡」とするものは福岡県教育委員会、「S COO」とするものは筑紫野市教育委員会が調査を行った。

【参考文献】

筑紫野市史編纂委員会『筑紫野市史 資料編(上) 考古資料』2001年

財団法人 古都大宰府を守る会「尾崎遺跡第1次調査」『大宰府・佐野地区遺跡群 Ⅲ』大宰府市文化財第 30 集 1993

福岡県教育委員会「大由り遺跡・野原坂遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書 第1集』1970

福岡県教育委員会「貝元遺跡Ⅰ」1988

福岡県教育委員会「貝元遺跡Ⅱ」1998

福岡県教育委員会「真ノ田遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XVI』1977

福岡県教育委員会「塚堂遺跡Ⅳ」浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集 1985

福岡市教育委員会「立花寺B遺跡 2」福岡市埋蔵文化財調査報告書第702集 2002

筑紫野市教育委員会「岡田地区遺跡群Ⅱ-1区調査-」筑紫野市文化財調査報告書第56集 1998

春日市教育委員会「門入遺跡」『春日地区遺跡群Ⅳ』春日市文化財調査報告書 第16集 1986

那珂川町教育委員会「松木遺跡Ⅰ」那珂川町文化財調査報告書第11集(下巻) 1984

福岡県教育委員会「天神遺跡」『平原古墳群』『国道200号線バイパス関係埋蔵文化財調査概報』福岡県文化財調査報告書第67集 1984

藤崎和久「古代製瓦地物の土師構造」『考古学ジャーナル』6 No.559 ニューサイエンス社 2007

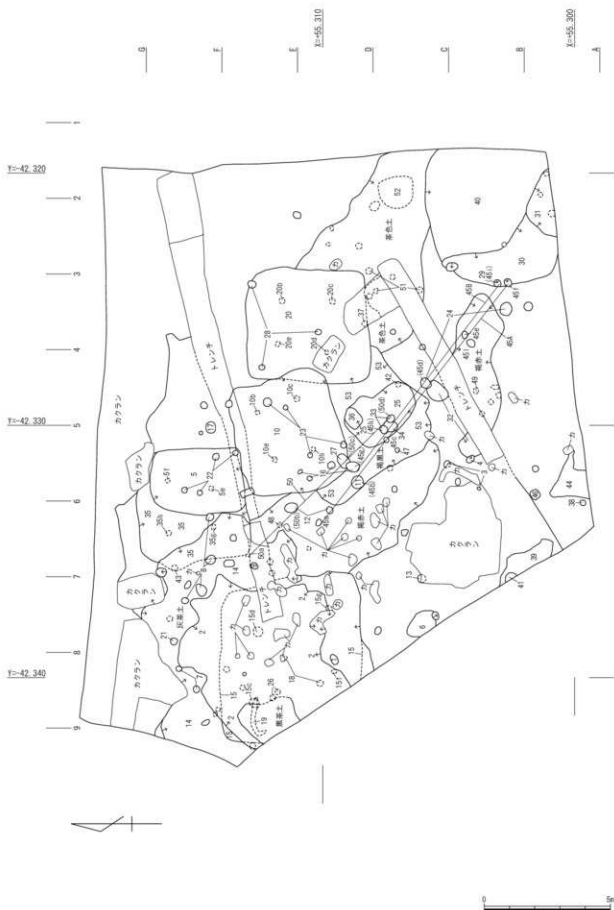


fig. 27 吉ヶ浦遺跡第3次調査遺構配置図 (S = 1/150)

吉ヶ浦遺跡第3次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	堆積土	備考	遺構切合	地区
1		小穴	灰褐色土			D8
2		溜り状遺構	暗灰色土→暗褐色土→黒茶色土		15→2	D7・8, E7・8, F7・8
3		小穴群	茶褐色土		32→4	B5
4		小穴	茶灰色土			B5
5	3S1005	竪穴住居		S-35と同一遺構	20→10→5	F5
6		溜り状遺構	灰褐色土			C7
7		小穴群	褐色土			F8
8		小穴群	暗褐色土		5→14→8	F6
9		小穴	暗褐色土			E6
10	3S1010	竪穴住居			20→10→5	E5・D5
11	3SA045b	小穴	暗褐色土			D5
12	3SA050b	小穴群	暗褐色土			D6
13		小穴	茶褐色土			C7
14		包倉層	灰茶色土			E6
15	3S1015	竪穴住居				E7・8, F8
16	3SA045g	小穴群	暗褐色土		10→27→16	D5
17		小穴	茶褐色土			F5
18		小穴群	暗褐色土		18→2	D8
19		溝状遺構	暗褐色土		19→2	E8
20	3S1020	竪穴住居			20→10→5	D3, E3
21		小穴	褐色土		14→21	F7
22		小穴群	暗褐色土		5→22	F5
23		小穴群	暗褐色土		10→23	D5
24	3SA045d	小穴群	暗褐色土		32→24	B3
25	3SK025	土坑			42→25→34→33, 25→36	D5
26		小穴群	暗褐色土		26→2	E8
27	3SA050c	小穴	黒色土		10→27→16	D5
28		小穴群	黒色土		20→28	E3
29	3SA045i	小穴			30→29	B3
30	3S1030	竪穴住居		S-40と同一遺構	30→31・29	A2
31		溜り状遺構	灰褐色土		30→31	A2
32		溜り状遺構	灰黄色土		32→4・24	B4
33	3SA045h	小穴群	暗褐色土		25→34→33	C4
34	3SA050d	小穴群	暗褐色土		25→34→33	C5
35		小穴	黒色土		25→34→33	C5
35	3S1005	竪穴住居		S-5と同一遺構		F6
36		小穴	暗褐色土		25→36	D4
37		小穴	黒色土		20→37	D3
38		小穴	灰褐色土			A6
39		溜り状遺構	灰黄色土		39→41	A6
40	3S1030	竪穴住居		S-30と同一遺構		B2
41		小穴	灰褐色土		39→41	B7
42		小穴	灰褐色土		42→25	C4
43		小穴	暗褐色土		43→35	F6
44	3SX044	不明遺構	灰黄色土			A5
45	3SA045	櫛列		S-11・16・24・29・33	30→10・25→50→5・45	C4
46		小穴	灰褐色土			A5
47		小穴	暗褐色土			C5
48		小穴		褐色土下層検出		E6
49		小穴		褐色土下層検出		B4
50	3SA050	櫛列		S-12・27・33	30→10・25→50→5・45	D5
51		小穴群		茶色土下層検出		C3
52	3SK052	土坑		茶色土下層検出		C2
53		包倉層	褐色土			D4

吉ヶ浦遺跡第3次調査 土器計測表

図号	器種	形状	口径	高さ	底径	備考
S-2埋赤土						
fg20-1	001	須臾器	—	4.5±0	—	胴部径(9.2)
fg20-3	002	須臾器	寛	(17.4)	4.0±0	—
fg20-1	003	須臾器	平蓋	—	2.4±0	—
fg20-4	005	土師器	製+瓶	—	5.4±0	総身長3.4 胴口3.5 踵2.0
S-2埋赤土						
fg20-5	001	土師器	鉢	(13.3)	4.5±0	—
fg20-2	002	須臾器	高坪	—	3.1±0	—
S-5						
fg17-10	001	土師器	小鉢	2.3±0	—	底径
fg17-11	002	土師器	小鉢	2.8±0	—	底径
fg17-3	003	土師器	楕形鉢	(12.9)	2.1±0	底径
fg17-14	005	縄文土師	鉢	—	3.5±0	—
fg17-2	006	須臾器	平	(12.0)(14.8)	4.0±0	—
fg17-4	007	土師器	鉢	(13.0)	4.9±0	最大径(13.8)
fg17-5	008	土師器	鉢	(13.6)	4.6±0	最大径(14.0)
fg17-7	009	土師器	鉢	(12.1)	3.8±0	—
fg17-8	010	土師器	鉢	(13.2)	6.6	最大径(14.0)
fg17-8	011	土師器	小蓋	(10.1)	13.5	4.5 最大径(14.1)
fg17-9	012	土師器	蓋	(23.5)	23.0	9.8 最大径(28.25)
fg17-12	013	土師器	小鉢	(5.4)	29.5±0	手挽り土器
fg17-13	014	縄文土師	鉢	—	3.8±0	—
S-5						
fg18-10	001	土師器	鉢	(14.7)	—	底径
fg18-2	002	土師器	蓋	(11.7)	9.1	最大径(14.9)
fg18-3	003	土師器	蓋	(10.0)	11.0	4.5
fg18-3	004	土師器	蓋	—	5.3±0	—
fg18-7	005	土師器	鉢	(12.8)	6.0	最大径(14.8) 底径
fg18-4	007	土師器	小蓋	13.6	(17.8)	(4.4) 最大径(17.5)
fg18-11	008	土師器	小蓋	(11.6)	4.9±0	—
S-10						
fg19-1	001	土師器	鉢	(12.2)(15.2)	5.55	内側に穴付具
fg19-2	002	土師器	蓋	—	4.8±0	胴部径(8.1)
fg19-8	003	土師器	製+瓶	総身長4.2±0	4.2±0	胴口3.1
fg19-2	004	土師器	高坪	(15.6)	4.2±0	—
fg19-3	005	土師器	高坪	—	6.0±0	胴部径(10.8)
fg19-6	006	土師器	瓶	—	15.1±0	—
fg19-7	007	土師器	瓶	—	4.7±0	—
fg19-4	009	土師器	蓋	—	1.7±0	—
S-10a						
fg19-10	001	土師器	鉢	3.25	2.6-3.0	2.7 ミニチュア土器
S-10a埋赤土						
fg19-2	001	土師器	鉢	—	11.5±0	—
fg19-1	002	土師器	蓋	(14.2)	3.6±0	—
fg19-3	003	土師器	鉢	—	3.5±0	(8.6) 外側に裏面圧痕
S-10a埋赤土						
fg19-1	001	土師器	小鉢	(14.6)	4.1±0	—
S-10T-1						
fg19-1	001	土師器	小鉢	(10.9)	14.5	最大径12.9
fg19-3	003	須臾器	平蓋	12.4	4.6	内面に穴付具
fg19-5	004	土師器	楕形鉢	(11.3)(12.6)	3.25	底径
fg19-4	005	土師器	蓋	(15.5)	9.8±0	—
S-11(6)						
fg19-1	001	須臾器	高坪	—	5.4±0	胴部径(9.5)
S-15						
fg20-6	001	須臾器	製+瓶	—	3.5±0	—
fg20-7	002	須臾器	製+瓶	—	4.3±0	10.45
fg20-1	005	須臾器	蓋	(11.1)(13.35)	3.55	—
fg20-9	008	土師器	鉢	—	7.8±0	—
fg20-4	007	土師器	小鉢	—	3.8±0	—
fg20-2	008	土師器	鉢	(11.2)	5.1±0	最大径13.2
fg20-3	009	土師器	鉢	(11.8)	6.25	最大径13.1
S-15埋赤土						
fg20-5	001	須臾器	高坪	12.2	6.8	—
fg20-2	002	須臾器	高坪	(12.4)	4.4	—
fg20-3	003	須臾器	高坪	(12.9)	4.75	—
fg20-5	004	須臾器	高坪	(12.3)	4.6	外側にへう記号かた
fg20-5	005	須臾器	高坪	(12.3)(14.7)	(4.6)	内面にシツ痕
fg20-6	006	須臾器	高坪	(17.5)	4.9±0	—
fg20-9	007	土師器	鉢	(22.8)	4.1±0	—
fg20-10	008	土師器	鉢	(12.1)	7.5±0	最大径(14.25)
fg20-7	009	土師器	楕形鉢	(14.4)	5.3±0	底径
fg20-8	010	土師器	楕形鉢	—	1.85±0	—
fg20-11	011	土師器	鉢	—	6.6±0	—
fg20-13	013	土師器	鉢	9.35-8.7	7.7	2.9
fg20-12	014	土師器	鉢	—	11.6±0	最大径14.8
fg20-14	015	土師器	鉢	—	5.3±0	6.0
S-15a						
fg21-1	001	土師器	鉢	(12.5)	5.85	最大径(13.1)
S-15a埋赤						
fg21-1	001	土師器	鉢	(13.1)	3.65±0	最大径(13.7)
S-15a						
fg21-1	001	土師器	鉢	(14.0)	15.2±0	—
S-15a						
fg21-1	001	土師器	蓋	(10.2)	5.25±0	最大径(10.7)

図号	器種	形状	口径	高さ	底径	備考
S-15T-1						
fg22-2	001	須臾器	高坪	—	5.1	最大径13.25
fg21-3	002	土師器	鉢	(12.8)	6.4	最大径(13.4)
fg21-2	003	土師器	鉢	(12.2)	4.5±0	最大径(12.8)
fg21-4	004	土師器	鉢	(11.8)	6.1	最大径(12.8)
S-20						
fg22-1	001	須臾器	高坪	—	6.1	底径
fg22-6	002	須臾器	高坪	—	5.0±0	—
fg22-8	003	土師器	鉢	(3.0)	1.95	(1.4) ミニチュア土器
fg22-8	004	土師器	鉢	—	8.25±0	—
fg22-10	005	土師器	高坪	14.1	8.1	胴部径(9.25)
fg22-10	006	須臾器	平	—	4.1±0	—
fg22-10	007	須臾器	平	—	2.1±0	—
fg22-11	008	土師器	鉢	(16.2)	11.9	(6.7)
fg22-7	009	土師器	瓶	17.5	15.7	4.5
fg22-11	010	縄文土師	不明	—	2.1±0	—
fg22-3	013	土師器	蓋	(11.8)	16.7	最大径(14.7)
S-20T-7						
fg23-2	001	土師器	小蓋	—	7.75±0	4.5
fg23-2	002	土師器	蓋	(30.0)	(25.0)	(4.2)
fg23-2	003	土師器	蓋	(23.1)	(23.0)	7.4
fg23-1	004	土師器	鉢	(12.8)	5.3	最大径(13.8) 底径
fg23-5	005	土師器	鉢	12.4	m=8.0	6.8 最大径13.7
fg23-6	006	土師器	蓋	—	8.65±0	3.25
fg23-9	001	土師器	蓋	—	10.75±0	2.1
fg23-8	008	土師器	小蓋	14.15	16.7	最大径(15.25)
S-25						
fg25-1	001	土師器	鉢	—	4.7±0	—
fg25-1	002	土師器	鉢	(14.2)	6.0±0	最大径(14.7)
fg25-3	003	縄文土師	製附保鉢	—	3.9±0	(8.3)
S-27						
fg10-1	001	土師器	鉢	—	2.8±0	内外面に溝付具
S-30						
fg24-1	001	須臾器	蓋	—	2.3±0	—
fg24-2	002	須臾器	蓋	—	1.6±0	—
fg24-3	003	須臾器	蓋	—	7.25±0	—
fg24-4	004	須臾器	蓋	—	3.9±0	—
S-31						
fg22-1	001	土師器	小鉢	(10.0)	5.0±0	—
S-35						
fg17-13	002	土師器	高坪	—	2.25±0	—
fg17-13	003	土師器	高坪	—	6.45±0	—
S-35a						
fg17-1	001	土師器	鉢	15.2	9.6-10.8	7.3
S-40						
fg17-1	001	須臾器	高坪	—	6.1±0	—
S-45						
fg24-5	001	須臾器	高坪	—	5.75±0	—
S-54						
fg20-2	001	須臾器	高坪	—	4.5±0	—
fg20-1	002	須臾器	高坪	—	2.9±0	—
S-52						
fg20-1	001	須臾器	高坪	—	8.2±0	—
fg20-2	002	須臾器	高坪	—	6.1±0	12.2
埋赤土						
fg20-1	001	須臾器	高坪	—	3.1±0	(8.2)
fg20-1	002	土師器	鉢	—	4.8	—
赤土						
fg20-2	001	須臾器	高坪	—	1.2±0	—
fg20-1	002	土師器	鉢	—	3.3±0	—
カマシ						
fg20-1	001	須臾器	高坪	—	7.75±0	—
fg20-2	002	土師器	鉢	—	2.25±0	—
赤土						
fg20-1	001	須臾器	高坪	—	7.9±0	—
fg20-2	002	須臾器	高坪	—	3.0±0	—

吉ヶ浦遺跡第3次調査 出土遺物一覧表(1)

*S番号の()は遺構順位の遺構番号

5-1	土 器 鉢×壺、磁片
5-2	土 器 鉢×鉢、壺×鉢、磁片
5-2褐色土	灰 煎 鉢
土 器 鉢、壺×壺×鉢、壺×鉢、鉄器具、磁片	
弥生土 壺 (磁石)	
5-2B褐色土	灰 煎 鉢
弥生 鉢	
土 器 鉢、壺×壺×鉢、壺×鉢、鉄器具、磁片	
弥生土 壺 (磁石)	
5-2B灰色土	灰 煎 鉢、磁土塊
灰 煎 鉢	
土 器 鉢、壺(内面ナツ)、壺×壺	
土 器 鉢、小坪?、鉢×壺、壺×鉢、壺×小鉢、坪?、高坪、高坪×鉢 (東北内~外面)、壺、壺×壺×鉢、壺×鉢、壺、小鉢、鉢、小鉢、鉄器具、磁片	
石 製 品 板状木製品(滑石製)	
弥生土 壺	
土 器 土 壺	
その他 磁土塊	
5-3	土 器 磁片
5-4	土 器 磁片
5-5	灰 煎 鉢
土 器 鉢、磁器片、高坪×壺、壺、小壺、壺×壺、壺×壺×鉢、壺×鉢、壺、小鉢、鉢×鉢、鉄器具、磁片	
弥生土 壺	
土 器 土 壺	
その他 磁土塊	
5-5カマド	土 器 小壺、壺×鉢、鉄器具、磁片
5-5カマド周辺	土 器 磁片
5-5a	土 器 鉢
5-5j~g	土 器 壺×壺×1、坪?、壺?、小壺?、坪?、坪?
その他 磁土塊等	
5-6	土 器 鉢×鉢、磁片
5-7	土 器 磁片
5-8	灰 煎 鉢
土 器 鉢、鉄器具、磁片	
その他 磁土塊	
5-10	灰 煎 鉢
土 器 鉢、坪、坪×鉢、高坪、壺、壺×壺、壺×壺×鉢、壺×鉢、壺×鉢、壺、小鉢、鉢、鉄器具、磁片	
弥生土 壺	
土 器 鉢、壺×壺×鉢、壺(口)?、壺(底)?、壺(底)?、壺(底?)、壺(底?)	
その他 磁土塊、磁片、滑石片、磁石	
5-10a	土 器 鉢(手取?のナツ土製)、壺×鉢
その他 磁土塊	
5-10a赤褐色土	土 器 壺、小壺、壺×鉢、磁片
その他 磁土塊	
5-10a褐色土	土 器 壺、小壺、鉄器具、磁片
5-10b	土 器 壺×鉢

5-10f	土 器 鉢
5-10g	土 器 鉢
5-10j~e	灰 煎 鉢
土 器 鉢	
土 器 鉢、小壺?、磁器片等	
その他 磁土塊等	
5-11(4a)	灰 煎 鉢
土 器 鉢	
土 器 鉢、壺×鉢、鉄器具、磁片	
5-12(5a)	土 器 磁片
5-13	土 器 鉢×鉢、磁片
その他 磁土塊	
5-14	灰 煎 鉢
土 器 鉢	
弥生土 壺	
その他 磁土塊	
5-15	灰 煎 鉢
土 器 鉢	
石 製 品	
弥生土 壺	
土 器 鉢	
その他 磁土塊、滑石片	
5-15(茶土)	灰 煎 鉢
土 器 鉢	
土 器 鉢	
土 器 鉢	
弥生土 壺	
その他 磁土塊、滑石片	
5-15(灰白土)	灰 煎 鉢
土 器 鉢	
その他 磁土塊	
5-15a	土 器 鉢
5-15b	土 器 鉢
土 器 鉢	
石 製 品	
その他 滑石片	
5-15c	灰 煎 鉢
土 器 鉢	
その他 磁土塊	
5-15d	土 器 鉢
5-15e	土 器 鉢
5-15f	土 器 磁片
その他 滑石片	
5-15g	灰 煎 鉢
土 器 鉢	
土 器 鉢	
土 器 鉢	
5-15h	土 器 鉢
5-15i~e	土 器 鉢
5-16(4a)	灰 煎 鉢
土 器 鉢	
土 器 鉢	
その他 磁土塊	
5-17	土 器 磁片

吉ヶ浦遺跡第3次調査 出土遺物一覧表 (2)

* S番号の () は遺物整理後の遺物番号

5-18	土 師 器 鉢、破片
5-19	土 師 器 弥生具
5-20	弥 生 器 高坪蓋、杯、甕(内函ナゾ)、破片
土 師 器 杯(手取(コナメア土師)、高坪、甕、甕×甕、甕×甕×鉢、甕×鉢、蓋、鉢、甕×甕×手、弥生具、破片	
瓦 器 破片	
石 製 品 石臼了、クワツナドブレード(ah)、ナツブ(ah)、破片(ash)	
弥 生 土 師 甕、甕(15・19他)、甕(16)、甕(破2)、甕(破3)、高坪×甕(丹能)	
弥 生 土 師 高坪×甕、甕×甕	
縄 文 土 師 破片(中～前期)	
そ の 他 焼土塊	
5-20a	土 師 器 甕、鉢×鉢、破片
そ の 他 焼土塊	
5-20f	土 師 器 甕
5-20g(1～5)	土 師 器 押型、鑿型、小鑿型(2)、磨治形、鉢、破片
5-21	土 師 器 破片
石 製 品 破片(ah)	
5-22	土 師 器 破片
5-23	弥 生 器 甕(内函ナゾ)
土 師 器 甕×鉢、弥生具、破片	
5-24(5A)	土 師 器 破片
5-25	弥 生 器 甕(内函ナゾ)
土 師 器 杯、甕、甕×甕、甕×甕×鉢、甕×鉢、鉢、弥生具、破片	
弥 生 土 師 甕(15)、磨治形(1)	
縄 文 土 師 粘質砂土(縄文前期～中期)	
そ の 他 滑石片	
5-26	土 師 器 破片
5-27(3a)	弥 生 器 杯、甕(内函ナゾ)
土 師 器 甕×甕×鉢、甕×鉢、鉢、弥生具、破片	
5-28	土 師 器 甕×甕×鉢、甕、破片
弥 生 土 師 甕(16)	
5-28(4)	土 師 器 弥生具
弥 生 土 師 甕(破2)	
5-30	弥 生 器 甕
土 師 器 弥生具?	
弥 生 土 師 甕(14)、甕(15)、甕(16)、甕(破3a)、甕(破3b)、高坪×甕(磨治1)	
甕、甕×甕、甕?、破片	
5-31	土 師 器 小鉢、破片
5-32	土 師 器 甕×甕×鉢、破片
5-33	土 師 器 甕×甕×鉢、甕×鉢、破片
5-34	弥 生 器 甕(内函ナゾ)、甕×鉢、破片
5-35(3)	弥 生 器 押型(小皿(18～21)、杯×高坪、甕(内函ナゾ))
土 師 器 杯、杯×高坪、甕、甕×甕×鉢、甕×甕、甕×鉢、蓋、鉢、弥生具、破片	
弥 生 土 師 高坪×甕、甕×甕、甕	
そ の 他 焼土塊	
5-35a(5)	土 師 器 甕×甕×鉢、甕×鉢、鉢、弥生具
弥 生 土 師 甕(破2)	
5-35a(5)	土 師 器 甕、弥生具、破片
弥 生 土 師 無磨治形(磨治1)	

5-36	弥 生 器 甕(内函ナゾ)
土 師 器 甕、甕×鉢、弥生具、破片	
5-37	土 師 器 破片
5-38	土 師 器 破片
5-39	土 師 器 甕、甕×鉢、弥生具、破片
5-40(3a)	弥 生 土 師 甕
5-41	土 師 器 破片
5-42	土 師 器 甕、破片
5-43	土 師 器 甕×甕×鉢、弥生具、破片
5-44	弥 生 土 師 甕(16)、破片
5-45	土 師 器 破片
5-47	土 師 器 甕×甕×鉢
5-48	土 師 器 破片
5-49	弥 生 土 師 甕(丹能1)
5-51	弥 生 土 師 甕(16)、甕×甕、破片(丹能)、破片
5-52	石 製 品 フレーツ(ah)
弥 生 土 師 破片	
縄 文 土 師 粘質砂土(前期)	
土 師 器 甕、甕×甕×鉢、甕×甕、甕×鉢、鉢、破片	
石 製 品 ナツブ(ah)	
弥 生 土 師 甕、甕(15×6)、甕(16)、甕(破2)、甕×甕、破片	
焼土	
弥 生 器 甕(内函ナゾ)	
土 師 器 甕×甕、弥生具、破片	
弥 生 土 師 甕(16)	
焼土	
弥 生 器 甕(内函ナゾ)	
土 師 器 甕、甕×甕×鉢、甕×甕、甕×甕、鉢、弥生具、弥生具了、破片	
弥 生 土 師 甕(磨治1)、式口蓋、破片(丹能)	
カクラン	
弥 生 器 押型(小皿(1～5)、杯(小皿(1～5))、高坪、甕(内函ナゾ))	
土 師 器 杯(手取(コナメア土師)、甕、甕×甕×鉢、甕×甕、甕×鉢、鉢、弥生具、破片)	
石 製 品 石臼了	
弥 生 土 師 甕(16)、甕×甕、甕、丹能)、破片(丹能)	
鉄製	
弥 生 器 杯、甕	
土 師 器 甕、甕×鉢、甕×鉢、甕×甕×鉢、鉢、弥生具、破片	
石 製 品 打製石(片刃)、磨製石(磨治形)、磨治不明品	
弥 生 土 師 甕×甕、甕(15)、甕(破2)、甕(破3)	
土 師 器 弥生土製品	

写真図版



1. 調査区全景 (右が北)



2. 調査終了後全景
(北東より)



3. 調査区西壁土層
(東より)

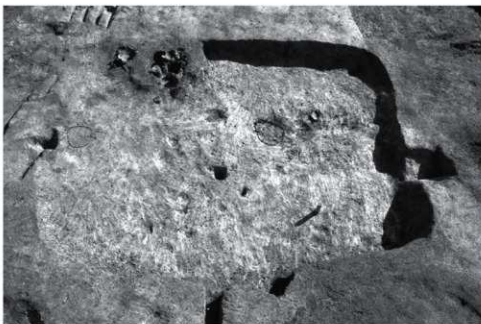
1. 調査区南壁土層
(北より)



2. 3S1005 南北ベルト土層
(東より)



3. 3S1005a・e・f 検出状況
(西より)

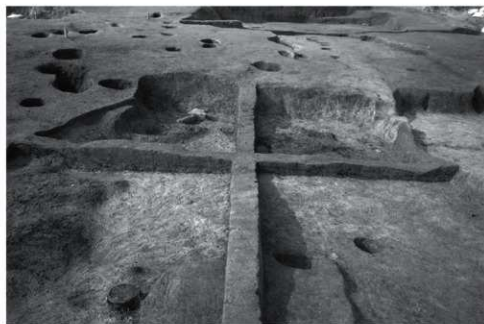




1. 3S1005a 検出状況
(近景) (西より)



2. 3S1005 完掘状況 (西より)



3. 3S1010 南北ベルト土層
(東より)



1. 3SI1010a 検出状況
(西より)



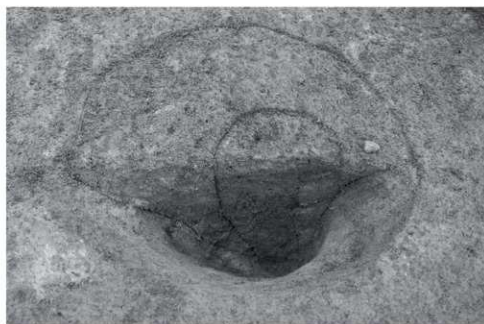
2. 3SI1010a 検出状況 (近景)
(西より)



3. 3SI1010 完掘状況 (西より)



1. 調査区西壁土層近景
(S-2・14・15 部分) (東より)



2. 3SI015e 土層
(南より)



3. 3SI015a 検出状況 (近景)
(南より)



1. 3SI1015 完掘状況 (北より)

2. 3SI1020 東西ベルト土層
(南より)3. 3SI1020a 検出状況 (近景)
(西より)



1. 3S1020 炭化物出土状況
(西より)



2. 3S1020 炭化物除去状況
(西より)



3. 3S1030 土層 (北より)



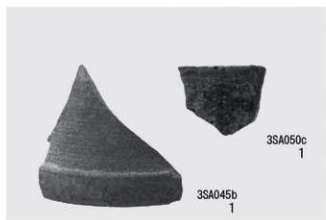
1. 3S1030 完掘状況 (東より)



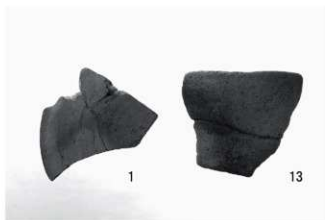
2. 3SK025 東西ベルト土層
(南より)



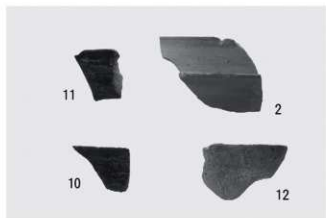
3. 3SK025 完掘状況 (西より)



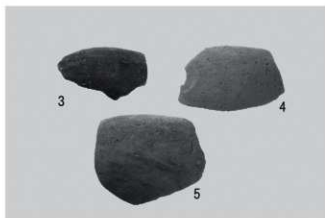
1. 3SA045b・050c 出土遺物 (fig. 16)



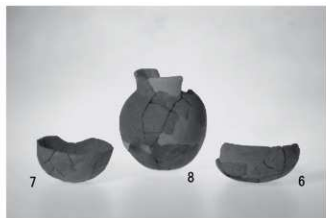
2. 3SI005 出土遺物 (fig. 17)



3. 3SI005 出土遺物 (fig. 17)



4. 3SI005 出土遺物 (fig. 17)



5. 3SI005 出土遺物 (fig. 17)



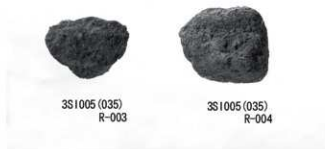
6. 3SI005 出土遺物 (fig. 17)



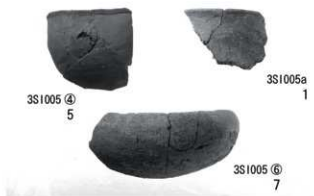
7. 3SI005 出土遺物 (fig. 17)



8. 3SI005 出土焼土塊 (fig. 17・18)



1. 3SI005 出土焼土塊



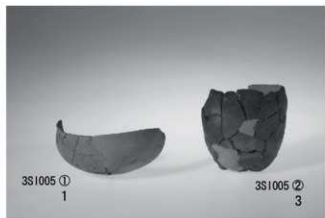
2. 3SI005a・④・⑥出土遺物 (fig. 17・18)



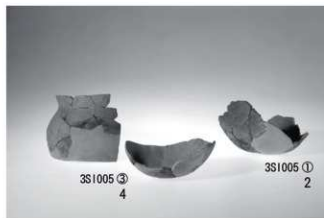
3. 3SI005i 出土遺物 (fig. 17)



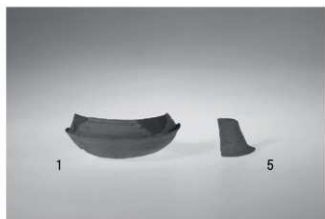
4. 3SI005j 出土遺物 (fig. 17)



5. 3SI005 ①・②出土遺物 (fig. 18)



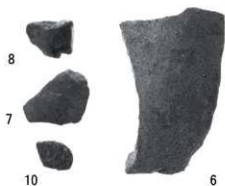
6. 3SI005 ①・③出土遺物 (fig. 18)



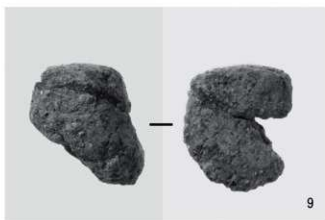
7. 3SI010 出土遺物 (fig. 19)



8. 3SI010 出土遺物 (fig. 19)



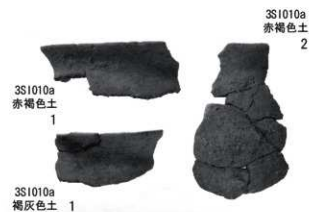
1. 3SI1010 出土遺物 (fig. 19)



2. 3SI1010 出土遺物 (fig. 19)



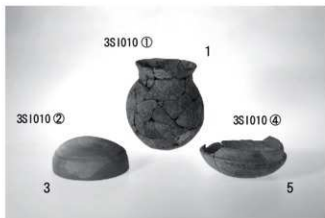
3. 3SI1010a 出土遺物 (fig. 19)



4. 3SI1010a 赤褐色土・褐灰色土出土遺物 (fig. 19)



5. 3SI1010a 赤褐色土出土遺物 (fig. 19)



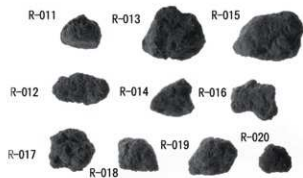
6. 3SI1010 ①・②・④出土遺物 (fig. 19)



7. 3SI1010 ③出土遺物 (fig. 19)



8. 3SI1010 出土焼土塊 (fig. 19)



1. 3SI010 出土烧土块



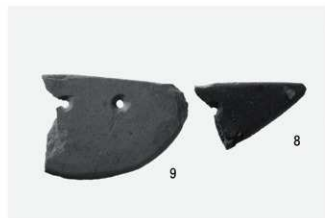
2. 3SI015 出土遗物 (fig. 20)



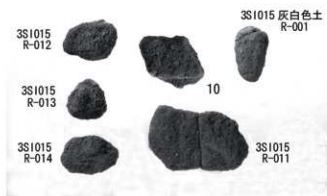
3. 3SI015 出土遗物 (fig. 20)



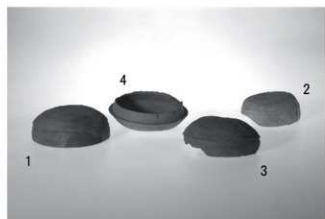
4. 3SI015 出土遗物 (fig. 20)



5. 3SI015 出土遗物 (fig. 20)



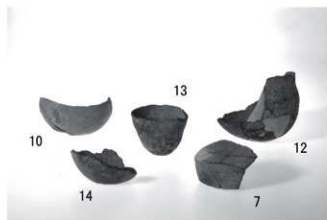
6. 3SI015 出土烧土块 (fig. 20)



7. 3SI015 灰茶色土出土遗物 (fig. 20)



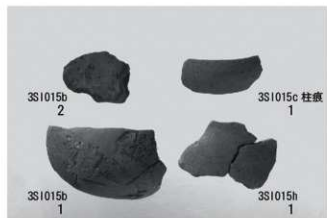
8. 3SI015 灰茶色土出土遗物 (fig. 20)



1. 3SI015 灰茶色土出土遺物 (fig. 20)



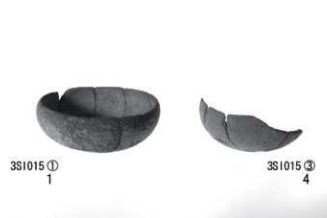
2. 3SI015 灰茶色土出土遺物 (fig. 20)



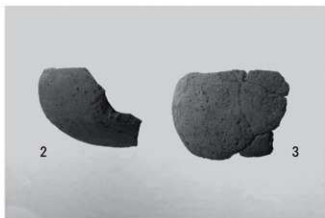
3. 3SI015b・c 柱痕・h 出土遺物 (fig. 21)



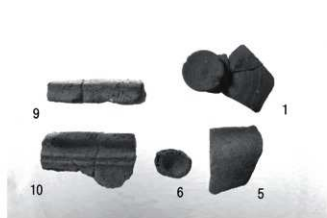
4. 3SI015g 出土遺物 (fig. 21)



5. 3SI015 ①・③出土遺物 (fig. 21)



6. 3SI015 ②出土遺物 (fig. 21)



7. 3SI020 出土遺物 (fig. 22)



8. 3SI020 出土遺物 (fig. 22)



1. 3S1020 出土遺物 (fig. 22)



2. 3S1020 出土遺物 (fig. 22)



3. 3S1020 出土遺物 (fig. 22)



4. 3S1020 出土焼土塊 (fig. 22)



5. 3S1020 ②出土遺物 (fig. 23)



6. 3S1020 ②出土遺物 (fig. 23)



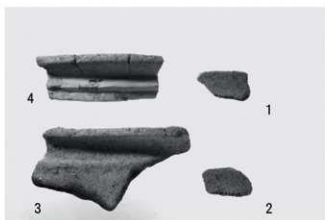
7. 3S1020 ②・③出土遺物 (fig. 23)



8. 3S1020 ④・⑦出土遺物 (fig. 23)



1. 3SI020 ⑤・⑥出土遺物 (fig. 23)



2. 3SI030 出土遺物 (fig. 24)



3. 3SI030 出土遺物 (fig. 24)



4. 3SK025 出土遺物 (fig. 25)



5. 3SK052 出土遺物 (fig. 25)



6. 3SK052 出土遺物 (fig. 25)



7. 3SX002 暗茶色土出土遺物 (fig. 25)



8. 3SX002 暗灰色土出土遺物 (fig. 25)



3

1. 3SX002 暗灰色土出土遺物 (fig. 25)



1

2. 3SX031 出土遺物 (fig. 25)



1



2

3. 3SX044 出土遺物 (fig. 25)

褐赤色土

茶色土



2



2



1



1

4. 褐赤色・茶色土出土遺物 (fig. 26)



1

5. カクラン出土遺物 (fig. 26)



2

6. カクラン出土遺物 (fig. 26)



2



7



1

7. 表採遺物 (fig. 26)



4

5

6

3

8. 表採遺物 (fig. 26)

報告書抄録

ふりがな	よしがうらいせき								
書名	吉ヶ浦遺跡								
副書名	第3次調査								
シリーズ名	太宰府市の文化財								
シリーズ番号	第105集								
編著者	平島義孝 毛利恒彦 山村信榮								
編集機関	太宰府市教育委員会 埋蔵文化財サポートシステム								
所在地	太宰府市教育委員会 福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号 埋蔵文化財サポートシステム 佐賀県佐賀市新中町1番7号								
発行年月日	2008(平成20)年								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
よしがうらいせき 吉ヶ浦遺跡 第3次調査	だぎいんしたまお 太宰府市高樋 6丁目4238-3外4	402214	312-003-1	+55.310	-42.330	20061018	20061206	384	宅地造成
所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構		主要遺物			特記事項	
吉ヶ浦遺跡 第3次調査	集落跡	弥生～ 古墳	住居跡 横列 土坑		縄文土器 弥生土器 須志器 土師器 滑石製紡錘車 炭土塊 紅澤 石器				

太宰府市の文化財 第105集

吉ヶ浦遺跡

—第3次調査—

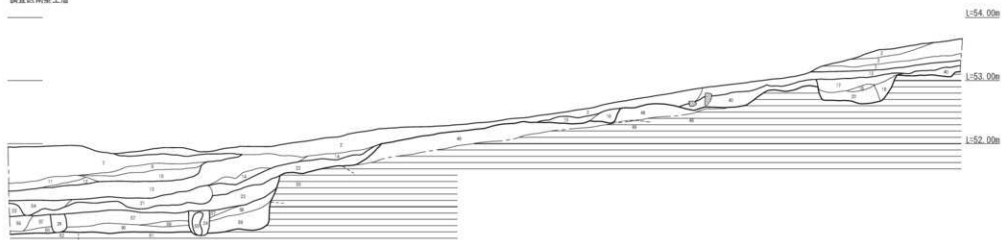
平成20(2008)年12月10日

発行 太宰府市教育委員会
〒818-0198 太宰府市観世音寺1-1-1

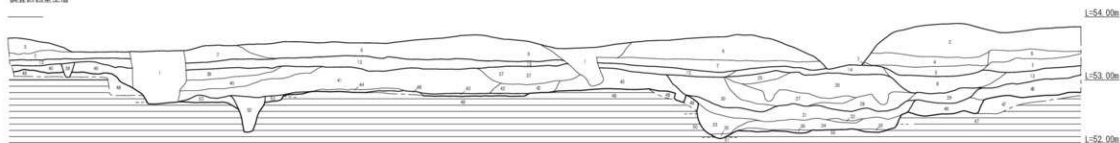
編集協力 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム
〒849-0924 佐賀市新中町1-7

印刷 大同印刷株式会社
〒849-0902 佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20

調査区南壁土層



調査区西壁土層



調査区南壁・西壁土層

- 1. 茶色砂質土 しまりなし<カクラン>
- 2. 緑黄色砂質土 しまりなし
- 3. 淡褐色砂質土 しまりなし
- 4. 灰褐色粘質土
- 5. 灰緑色粘質土
- 6. 灰褐色粘質土
- 7. 赤褐色粘質土
- 8. 黒褐色粘質土
- 9. 淡灰褐色粘質土
- 10. 淡赤褐色粘質土
- 11. 暗灰褐色粘質土
- 12. 暗赤褐色粘質土
- 13. 暗黒褐色粘質土
- 14. 黒褐色粘質土
- 15. 赤褐色粘質土
- 16. 黄褐色粘質土
- 17. 暗褐色粘質土 上部層を多量に含む
- 18. 赤褐色粘質土 炭化物 (φ2m) を少量含む
- 19. 淡褐色粘質土 炭化物 (φ2m) を少量含む
- 20. 灰黄色粘質土 炭化物 (φ2m) を少量含む

- 21. 灰黄色粘質土 炭化物 (φ2~5m) を少量含む
- 22. 淡黄灰色粘質土
- 23. 淡灰黄色粘質土 炭化物 (φ2~5m) を少量含む
- 24. 淡褐色粘質土 灰白色土、赤色土ブロック (φ1~2m) を多量に含む<柱状>
- 25. 淡赤褐色粘質土
- 26. 暗赤褐色粘質土 炭化物 (φ2m) を少量含む
- 27. 淡褐色粘質土 赤色土ブロック (φ1~2m)、炭化物 (φ2m) を少量含む
- 28. 暗褐色粘質土 炭化物 (φ2m) を少量含む
- 29. 暗赤褐色粘質土 炭化物 (φ2m) を少量含む
- 30. 暗褐色粘質土 炭化物 (φ2m)、上部を少量含む
- 31. 褐色粘質土 炭化物 (φ2m)、上部を少量含む
- 32. 赤褐色粘質土 炭化物 (φ2m) を少量含む
- 33. 暗褐色粘質土 赤色土、黄色土ブロック (φ1~2m) を多量、炭化物 (φ2m) を少量含む
- 34. 淡褐色粘質土 炭化物 (φ2m)、上部を少量含む
- 35. 暗赤褐色粘質土
- 36. 灰白色粘質土 褐色土、赤色土ブロック (φ1~5m) を多量に含む
- 37. 暗灰褐色粘質土 炭化物 (φ2m) を少量含む <包含層>
- 38. 茶褐色粘質土 <柱状>
- 39. 暗赤褐色粘質土
- 40. 灰褐色粘質土
- 41. 淡灰褐色粘質土 赤色土ブロック (φ5m) を多量、黄色土ブロック (φ3m) を少量含む
- 42. 暗赤褐色粘質土

- 43. 暗灰褐色粘質土
- 44. 赤褐色粘質土 炭化物 (φ2m) を少量含む <包含層>
- 45. 淡灰褐色粘質土
- 46. 暗褐色粘質土 炭化物 (φ2m) を少量含む
- 47. 暗褐色粘質土
- 48. 赤色粘質土
- 49. 黄色粘質土
- 50. 灰白色粘質土
- 51. 灰白色粘質土
- 52. 暗褐色粘質土 灰白色土、黄色土ブロック (φ1~2m) を多量に含む <S-15層上>
- 53. 暗褐色粘質土 灰白色土ブロック (φ1~2m) を少量含む <S-10層上>
- 54. 暗褐色粘質土 赤色土ブロック (φ1~2m) を少量含む <S-14層上>
- 55. 暗赤褐色粘質土 <S-30層上>
- 56. 灰褐色粘質土
- 57. 暗褐色粘質土 灰白色土ブロック (φ1m) を少量含む
- 58. 暗褐色粘質土 褐色土ブロック (φ1~2m) を少量含む
- 59. 灰褐色粘質土 灰白色土、赤色土ブロック (φ1~2m) を多量に含む
- 60. 暗褐色粘質土
- 61. 暗褐色粘質土 白色粘質土の貫入が入る
- 62. 暗褐色粘質土

Fig. 4 調査区南壁・西壁土層実測図 (S = 1/60)